

二 御用部屋日記

1 滅知後の藩体制立て直し

三六 荒木玄蕃、剃髪入牢直前に上書を書き置く

『九曜桜永楽実記』 米田三郎家文書

荒木玄蕃聞入之時、書残被置候一書之事

一 先年(仙右久遠)天真院様へ上書仕候趣意乍恐奉申上候、先年仙

石左京へ御勝手方被仰付候節、都而御役所御番所等

古法古格に不相拘省略筋専らに可致、御家中之面々

上米、御領分へ分外之御用銀、皆納并に相納候趣に

依り褒美として御紋付御上下盃等相与へ、随順之者

懸り御役申と出坂為仕、御用立(連)之者より金子調達之

趣にて歩持人足数十人・四人或は六人持等荷物、金

銀と賞し福面を飾り、五色之幣等を附、行列大造に

粧ひ、御城内へ謡ひ込(仙右政美)込セ、信恭院様へも左京が御見

物進メ、出坂役人格外之加増拜領物等差遣し、後承

り候得は、過半鉛り様之物を金銀と申偽り候由、其

砌り町方へ都而風聴致し候様申談有之、諸商売新規

に問屋申付、運上を取り、自分宅の場等普請すニ御

家中諸士等酌等為仕、并射術見物、師範御用人以下

歴々相集々、上御名代を以御見分被仰付候取斗(付以下同)にて家内・下女等へも見物為仕候義(儀以下同)杯も有之、追年権威相募、其頃左京弟仙石左兵衛・岩田静馬を以申聞候、左京勤メ方、諸而寛仁之体規模相見へ候得は、五百石加増都合式千石代々上席之家格御取扱ひ御座候様相成呉候様申越候に付、私相对候は、決而左様之様子にも見請不申、御家中始追年困窮、御勝手向等未タ一方も御筋立之様子無之、都而風俗輕薄に相流れ、且左京御一門之家筋当時心儘之取斗權威相募候ては上御為筋不宜候之旨申述候処、其節は静馬義も同意に御座候、其後信恭院様御病中取斗筋并御同人様御大病御危急之趣、江戸表々申来候節、同役之者へ一向沙汰不仕、幼年之小太郎を召連出府仕候段合点不參、私義は病氣引込中、外同役義も不審仕、其旨天眞院様へ申上候所、御同人様にも兼而御不審に被思召、翌日酒勾清兵衛何角差含ミ出府被仰付候、右之趣に付御幼君之義、追年之所相厄み同役一統天真院

様へ申上候所、御同人様にも兼而御立腹、急度御咎メ可被仰付思召之趣に御座候得共、家筋之義、殊に是と相定メ候義無之、他邦へ聞へも如何之思召御座候得は、御政務に閑不申候得は、強而害も有之間敷旨、其段申上、御大老上席時務職御免、折々出仕被仰付候、其時分山村貢義御御用人、彼は四拾年来御側勤メ値遇を蒙り候者に御座候得は、其席之次第逐一承知、彼よりも申上仕候義も御座候、然ルに其後左京彼宅へ時々罷越、度々音物等相贈り、不(ひとならざ)一方熟懇、当時御年寄り役に加り、専ら左京へ随順、股肱之ものに御座候、全く欲心深き性質を見込、天真院様値遇を蒙り候者に御座候得は、左京何角相頼候為之義歟と奉存候、

一 弘道館懸り御役、仙石造酒助・酒勾清兵衛・磯野源太左衛門御役儀御免、慎み、学職桜井良藏蟄居被仰付、私義は出府中殊に帰着後無間も御役御免被仰付、委敷儀は承知不仕候得共、聊之行違、源太左衛門短

慮之性質を見込、尻押謀計之義も有之哉に風説仕候、是等は其節之学職其余之学懸り之者御聞糺被成下候ても相分り可申儀と奉存候、勿論左京御役御免中に御座候得共、家筋之儀に候得は、押て罷出之趣にて天真院様江申上、左京専ら取斗之趣に御座候、其節ハ左京婦役被仰付候、

一 仙石主計へ御勝手方懸り被仰付、老人役之事故同役之義度々申出候得共、左京始御用部（屋乙）合中今暫之時と申事にて一向取合不申、必至と難渋之御時節、御用人以下懸り御役人相談之上へ仕法立仕、主計より御用部屋へ相談に及候得は、左京・貢等故障申出、何事も其意に任せず、無余儀懸り御役之者御用部屋中一統連印証文之上、御領分御用達之者割合を以出銀、追年仕方一々相定、規定相濟候所、聊銀子調達仕兼御用達之者違却仕候義有之、懸り御役人齷忽吟味之筋に落着仕、御役難勤御役御免、其余懸り御役人小役之者ニ至り候まで御役御免、座席格外に慎被仰付、

右之通にて追年御役御免、当時在役に御座候之者、左京縁家并隨身之者に御座候得は、益（益）権威（益）に募、心之儘に取斗、殊に幼年より家来同様に取扱候宇野甚助其弟山本耕兵衛小役人ハ取立、高禄を与へ御用人御郡方兼帯御勘定元メ役等に仕置、都而彼等兩人之取斗に任せ、御家中へは連年面扶持、御領分へは度々御用銀、其上御年貢御收納之義、豊凶水干之無差別、定免に取立、是迄検見等之節成丈省略、下分難渋不仕様取斗御座候所を、近年相改り、御郡方懸り御役人相揃、供廻り等迄相備（そな）、多人数にて可罷出と申談、雑費夥敷、毛損（損毛）皆無等も難渋之村方も無余儀願不仕様之取斗、若し不納之者有之候得は、牢舎追放等に相成り、権威を以取立候故、旧家家柄之百姓も過半身上相潰し逼塞戸閉仕、誠に必止之困窮如何相成候哉と相危、且江戸表之儀は御勤先大切之場所柄、殊に上御幼年中、別而手厚に取斗可仕、毎々御年寄役兩人詰に御座候所、先年ハ老人詰に仕、御屋

敷向破損、御屋敷繕ひに手拔勝、御居間迄雨洩候位之義、上始上々様平日御飲食始日用御手元殊之外廳略之御手当、御不自由勝被為在候由、然ルに左京・静馬家内衣服綺羅を尽し、京都へ妾杯召寄、武備之義と申ながら、時節（ふにまじ）不似合高金之馬飼を置、先年静馬掃発之節杯は三、四拾兩も仕候位之馬三疋迄も引せ、左京儀は鷹杯も飼置、他国へ鷹匠召寄せ扶持仕置、御城内へも勝手為仕、且是迄不仕来具足着用始、悴小太郎に為仕、礼家師範其余門弟之者烏帽子大紋にて大礼を行ひ、并小太郎嫁女引取之節、御家中諸士之者迎として出府為仕、宇野甚助を京都へ差遣し一切支度相調わせ、途中行列先払出迎ひ等、并簞笥・長持等種々之飾りを付、御城内へ謡込せ、都而之粧ひ諸侯に類し候次第之由に御座候、其余左京家内娘妾杯、平常衣類美麗家器飲食等之義は勿論、静馬・貢以下御勝手方懸り之者、同様家器等之義万端に御座候得は挙て難申上御座候、然ルに表役外様之

者に御座候得は、相応之禄高御座候共、年々之面扶持にて、大半必至困窮、家器之類は申に不及、代々持伝へ候武器に至迄代成し、今日を相凌ぎ少身諸士以下之者に御座候得は、七、八歩飢寒凌ぎ兼候位之儀に御座候、加之、左京へ随順仕候へは自然昇進仕疎遠之者に御座候得は被差押候体に御座候故、賄賂専ら行、忠孝之風自ら廢し、追從輕薄仕候を能時を知と申候様之風俗に相成、同心懇意之者共御座候も權威に恐れ互に相疑ひ、當時を相語り候義相憚り候体に御座候、

一 天真院様御堅き御性質に御座候所、左京・貢へ随順、年来御側勤メ仕候鳥居梢姪、小川英之助へ縁組願相濟有之候を、彼と相談為致、御妾へ相進メ、殊ニ血統に不宜家筋、且御家来之娘を御妾と申儀、御代々無之義、全蠱惑被遊候様之取斗、甚以不得其意儀に奉存候、

一 早川保輔義左京格外之懇意仕、信恭院様御病中取斗

甚々合点不参、左京彼へ相頼候義も有之哉に風説も有之、右等之義に御座候歟、其余同様之不束都筋有之候身分之者三人、宇野甚助が金子三百兩貸し遣し、又々去々辰年御国勝手被仰付候節、道中并に着之上家財雑用等御勝手方役が賄申付、宇野甚助口入にて親類之もの連印、御領分御用達之者より金五百兩出銀為仕、右金子を以親類之もの出府為、借財筋立為取斗候得共、今以何之御答メも無之、其儘に罷有候其上へ遠方へ引越、雜費入用も可有之哉にて、御勝手方より貸銀等も有之由、余人に御座候得は難黙止筋にて御憐愍相願候義体之儀も一切取上無之由、勿論融通少之義も六ツケ敷時節、右等之大金少身者之取持都て取斗、前方承及、左京頼筋有之候故之儀歟と奉存候、

一 先年当国御代官所生野浅田周平と申者、御領分用達之方へ罷越候節、信恭院様御忌日に御座候所、左京・静馬御勝手懸り之者罷越、魚鳥取扱ひ并に去秋天真

院様御病中京都が医師罷越候節、信恭院様御待夜、右医師左京方へ招き、魚鳥取扱ひ翌日御当日山村貢方へ右医師振舞同様之取斗ひ之由、重職之身分不似合至極、我儘之至と奉存候、右前後仕候義可有御座候得共、左京・静馬・貢等、行跡荒増前文之趣に御座候、私共御役御免に御座候へ共、無余儀辰正月十六日、天真院様へ箇条書を以申上、委細御目通り之上可申上、翌日出仕、度々御目通度々相願候処、從是御沙汰可有之趣にて不相叶、同廿二日隠居、逼塞・減知被仰付候、然ル処去午正月十六日御尋筋有之に付、出任可任旨被仰出候節、御不快中に付御名代を以御尋之趣にて、左京始御年寄中一統并に宇野甚助列座致し、上書仕候趣意并河野瀬兵衛離散後文通仕候儀無之、其趣御答仕候箇条之趣意之義は御答不仕、奉恐入候段御請ニ及ひ候、右は前文中上候通り、左京・静馬等身分之義、右之者當時御政務職とは申ながら、暫時相辞し余人之裁判可相待義、古今之通儀

敷と奉存候、然ルに、右一件自分宅に於て会合評儀に及び、当日其席へ列座、其向之内も口出等仕、私共之義罪人同様の御取扱ひ、一向決談と申様之義も無御座候得共、其覚悟にて可有之儀に御座候得共、左様之趣にも無御座候、御陰聞と申儀には御座候得共、御大病御精心も不常被為在候哉に承り、所詮不弁不行届候身分にて、如何申述候共趣意相立候儀共不奉存、却て争に至り変事に可及、左様相成候而は御為筋と奉申上候儀、却て御不為に相成り不忠之至りと奉存、彼是疑惑仕り、天真院様少々にも御快方に被為在候へ、又々折を以て可申上と、乍心外右黙止申候、然ル所退座後、一言申訳無之奉恐入候旨案文有之、相認メ差出可申旨、案外之儀に御座候得共無余儀案文通認メ差出申候、然ル所親類之者へ堅ク警固可仕被仰付、牢獄同様之身分、且天真院様御病氣追々被為募、終に御凶変に日夜痛心仕候而已にて、如何共仕方無御座く打過申候所、近日入牢可被

仰哉と承り候得は、聊寸忠之程不相立、且上御身分御大切と奉存候一条是非奉申上度、前後不行届身分に御座候得共、此上如何体之重料に被仰付候共、毛頭御怨み申上候心体無御座候、何分前文之趣御堅慮を以御聞糺被仰付被成下候へ、冥加至極難有仕合奉存候、右之段偏に御懺察之程奉願候、以上

*この文書は米里村庄屋米田治郎太夫が、仙石騒動に關する文書を写し取つて収めていた史料集中にあった。玄蕃は剃髪入牢直前にこの文書を記し自宅に残していた。それを天保六年夏、脇坂家の探索人が出石へ来たとき草川三右衛門が彼に渡し、脇坂安董の公裁指揮の好材料になったと推定できる（文書番号二六一参照）。

三七 岡幸蔵、風聞達し書

『九曜桜永楽実記』米田三郎家文書

仙石道之助家老 仙石左京

右老人にて家老職相勤、其外年寄と唱候重役荒木玄蕃（總以下同）を始メ、左京へ多人数随意無之者は役義取放、或は高

を減じ又は永々暇を申付、自分悴へ松平主税より縁組致し、娘を貰請、同所右手統を以去午年中出府之上、金五、六千兩余之音物を以御門家へ取入、左京威勢倍増長致、主税儀は松平周防守様御舎弟に付、縁統を以て御門家御逢も有之趣、然ル所仙石家勝手役河野某、謀悪之儀を存罷有、外年寄へ内意申聞候趣左京薄々聞および、少々之落度を申立、慎申付候由、神谷転儀も河野無二之懇意に付、左京謀悪之始末密に以手統を申遣候、彼是左京隨身者より同人に告候に付、即日河野儀は入牢申付、責問有之、転より申越候始末申立候に付、転儀も用向有之候間、国元へ罷越候様江戸表へ申來候所、転義河野より之内意露頭を察し、其夜出奔致、行衛不相知、先神谷転兄七五三国元へ呼寄せ、転行衛を穿鑿為致候所、麻布六軒町柔術師匠渋川伊吾世話を以一月寺へ入宗致、虚無僧に相成居候所を左京差図を以江戸留守居依田市右衛門・河野丹治(必)より筒井伊賀守殿用人へ相頼ミ、転召捕可引渡之趣懸合、則転儀横山町

往還にて被召捕、仙石家へ可引渡之由被申渡候処、奉行所吟味受度候旨、強て申候に付、転儀不容易筋申立依之に先揚屋入に相成候旨内糺之由、転申立之趣意隠居越前守去午年中国元に於て俄に病死、左京毒殺致候始末、尚又当主幼年に付、是又毒殺致候上、自分悴を以家督可致巧ミ、既に随意之ものには夫々立身申付、異儀之者には少々之落度に而等々も役義取放、軽きものにて元來内福之ものは撰立、立身為致、金子等借請、其上領分へ用金申付、多分之金子左京貯有之、謀志之由、世上風聞仕候に付、風聞書附御達申上候、

天保六乙未閏七月廿一日

岡 幸藏

*岡幸藏という人物については不明、隠密であったかも知れない。当時世上の風聞の動向を知る好史料である。

三ハ 仙石左京家族名 (天保六年十二月九日)

十一月二十六日

一夕方町奉行榊原主計頭様御呼出ニ付、丹次罷出候

1 減知後の藩体制立て直し

処、左之通御達書御渡被成候段罷歸候由、

仙石道之助家来

仙石左京・岩田静馬・宇野甚助

右三人之者家内之者名前・歳ニ付、明七日昼頃可差
出候事

但、歳ニ付難相分者、何歳位之旨可書出事

同二十七日

一 右ニ付、左之書面御留守居代り真田儀太夫持参、柳

原主計頭様江差出、

- 一 仙石左京妻 たづ 当末四十九歳
- 一 悴 仙石小太郎 当末二十一歳
- 一 二男 仙石正次郎 当末 四歳
- 一 娘 仙石小太郎縁女 佐や 同 十四歳
- 一 娘 河合与市縁女 りん 同 十四歳
- 一 娘 りやう 同 十七歳
- 一 娘 阿き 同 三歳

* 仙石左京妻、たづは岩田静馬の姉、先妻静子は文政十
二年に死亡、河合与市は後に寛吾と改名、りんはこ
の時離縁、(岩田静馬・宇野甚助家族名は略)

三九 領内百姓らに、出府嘆願見合わせを命ずる書状

(天保七年二月十一日)

江戸表当月二日別便相達候、御用向左之通申来

進啓、御領分百姓共内願之趣、何様奇特之儀ニ付、

殿様江茂達御聴、御兩家様へも御重役を以申上候処、

尤之儀奇特之至ニ思召、於上は御満足被遊候、(然力) 処此

節御慎中ニ罷在候而は万一御兩家様江御引渡杯

と申様ニ相成候而ハ、重々恐入候儀、何分此節之処

は先々差押置可然旨、御重役并ニ御留守居共申聞候

儀ニ御座候間、何分前段之趣其向へ申談候、何卒此

節相見合候之様御取斗專要ニ御座候、くれ〱志シ

之処、御賞美有之候様と存候、何分ニも兎角御慎中

は何事も無之、御無難ニ相統儀、希御事ニ御座候、

三〇 惣町へ御救米 (天保七年二月二十五日)

左之通町奉行へ申談 但、御勝手方并御目付へは申聞置

米百五拾石

惣町へ

右此節柄渡世難渋ニ付、為御救被成下候事

一 右惣町御家人之分除屋敷九百九拾貳軒之事、尤割付

之義(儀)ハ名主方ニ而取斗候様可申談候旨、町奉行へ申

聞置、

三三 脇坂安董の消息を報ずる書状

(天保七年二月二十七日)

江戸表当月十九日出別便相達候、

進啓、脇坂様御事、兼而夕御老中可被蒙仰哉との下沙

汰致し候処、去十六日西御丸御老中被蒙仰、大納言(留置家老)

様御用も御兼帯ニ御座候、左候得は全く伯耆守様之

御跡と相見へ申候、脇坂様ハ入御譜代故京・大坂ニ(未莊宗逸)

も御出無之処、此度ハ稀成御事ニ御座候、尤是迄御

家ニ無之故哉、先年植村様(植村家長)之通御老中格と被蒙仰、

多分西御丸下あたりへ御引移ニ可相成と被存候、御

年も七拾余と申事ニ相聞候、天明年中之御家督之由

ニ御座候、此上何卒伊豆守様(松平信悳)へも御本丸へ直ニ被為

成候様、希申候由、

三三 御手離れ阻止を出府嘆願の庄屋・大庄屋たち

(天保七年二月晦日)

左之通御代官申達候由、御郡奉行申達

美含郡大庄屋香住村

勘輔

訓谷村庄屋

善左衛門

隼人村庄屋

六三郎

右他行之儀、兼而御差留候処、存込之意願難黙止儀

御座候付、出府仕候旨京都ハ書中を以申越候、

養父郡広谷村

庄左衛門

惣右衛門

右他行之儀、兼而御差留之処、心願御座候付出府仕

候旨、宿元へ申置候由、

養父市場村

又右衛門

右同断、途中ハ宿元せがれ并村役人迄右同様申越候由、

気多郡大庄屋

木村新兵衛

伏村庄屋

浅右衛門

右殿敷被仰付之中、奉恐入候得共心願之儀有之出府

仕候旨、京都より以書中大庄屋上坂左衛門へ申遣候、
此段御達申上候由、

(天保七年三月七日)

熊野郡老歩村

忠藏

右兼而他参之儀御差留被置候処、心願難黙止儀御座
候付、奉恐入候得共先月廿五日出立出府仕候段、大
庄屋次郎右衛門へ申達候、

三三 領民ら脇坂安董へ駕籠訴 (天保七年三月二十日)

仙石道之助様御領分

但馬国美含郡訓谷村

百姓善左衛門

同領分同国同郡隼人村

同 六三郎

同領分同国気多郡伏村

同 儀右衛門

右之者今日致駕籠訴ニ付、御引渡可申候間其筋之御役
人中被差出候様中務大輔申候、以上

三月四日

*右は中川修理大夫家よりの書状である。同日阿部能

登守家よりも同様の書状が届いている。

脇坂様江差出候御嘆訴状左之通之由、

乍恐以書付御嘆願奉申上候

仙石道之助領分但馬出石郡・養父郡・気多郡・美含
郡村々惣代美含郡隼人村六三郎・訓谷村善左衛門・
気多郡伏村浅右衛門奉申上候、去未八月中領主家政
向之儀ニ付、家来多人数被召出御吟味御座候趣、乍
恐奉承知、右は不容易儀ニ御座候得共当御領主は
御若年之事ニ而家政向御携無之故、御家之故障ニ不
相成様仕度、領分百姓共一統願出度心得ニ而去未九
月中出府可仕と奉存、村々致相談候処、右風聞領主
役人江相聞被申渡候は、此節家来多人数御公辺江被
召出御介抱ニ相成居候段茂不弁百姓共身分ニ而嘆願
ニ罷出候而は、却而難相済旨嚴重ニ被差押候付、一
統存込も寒敷相成差控罷在、乍併右一件落着不被仰
付中願意奉申上度、思込日々難忘、又候十一月中旬
出府相催候処、小役人見廻り之節被差止、無詮方差

控罷在候内御年貢・上納等ニ差懸り、一統相談も難
相成、乍存延引罷在候、然ル処去ル未十二月下旬右
被仰渡之趣郡中江触有之、一統重々奉恐入、御家中
ハ不及申、百姓とも迄相慎罷在候得共、宝永之度御
領分ニ相成、是迄数年来御恩沢を奉請候領主手離ニ
相成候段、誠ニ以百姓共ニ於而甚嘆ケ敷奉存候間、
可相成御儀ニ御座候ハ、領主手離ニ不相成候様仕
度旨領分村々一統拳而相嘆居、左候得は速茂外ニ手
段も無之、此上は御当地江罷出御役人様江御継り奉
申上候外無御座候と存詰候間、不願恐出府、此段
御嘆願奉申上候、何卒格別之以御憐愍、領主手離ニ
不相成候様此上之御慈悲之程、偏奉願上候、以上

天保七申年三月

但州

出石郡

養父郡

気多郡

美合郡

脇坂中務大輔様

右村々惣代

美合郡隼人村

訓谷村

六三郎[㊦]

気多郡伏村

善左衛門[㊦]

浅右衛門[㊦]

(天保七年四月六日)

大久保加賀守様

美合郡香住村

勘助

気多郡堀村

新兵衛

養父郡広谷町

惣右衛門

脇坂中務大輔様

養父郡養父市場村

又右衛門

同 広谷村

庄左衛門

(三)

右之者共昨十七日、右之御方々御登城懸ケ御駕訴致し
候て、先日之通願書ハ御取上無之、此方様へ御引渡し
有之候様、御両家様御家来へ御引渡しし有之候由、則御
両家様御留守居外当方御留守居共迄申来候段申達候付、
此間之通末々申談置有之処、昨夜九時過比召連罷越、

無御受取前ニ於御作事、御勘定奉行及尋問候処、別紙願面之通ニ而外何も相替儀無之由、御目付立会、横山惣右衛門委細申達、於上は御満悦之儀ニ候得共、此節中之出訴并右御方々、御両家様御益介之儀恐入候旨申来、尤願書面写左之通

但、勘助・新兵衛・惣右衛門は阿部様、又右衛門・庄左衛門儀は中川様御引渡し有之候由ニ而、本文之通、昨夜御引渡し有之候由、

*願書面内容は前掲願書とはほ同意のため省略。

(天保七年五月十一日)

出石郡桐野村

甚太夫

中藤野森村

平右衛門

美含郡須野谷村

五郎左衛門

丹後熊野郡壱分村

治郎左衛門

作州勝南郡明見村

友三郎

同郡 岡村

徳兵衛

右之者共之内三人去月廿六日中川様へ罷出願書差出候

処、願書は御落手被成、追而可及御沙汰旨被仰渡、外三人之者共被召呼候上、六人之者一所ニ同夜御留守居曾我平馬召連罷越候付、例之通御目付・御勘定奉行・御徒士目付等并御留守居依田市右衛門儀出席ニ而、無御受取申候、未々於稽古所一応及吟味候処、矢張此方様年来奉蒙御恩沢事故、御手離之儀相嘆候趣申上候付、

明小屋江入置申候、尤願文は中川様へ御留置故、相知不申候、尤六人之者ニ而召仕三人有之候由ニ御座候、

只々百姓大勢ニ而差置候場所無之、皆一所ニ明キ部屋江入置申候由、

三四 領民の見舞品献上願 (天保七年二月二十五日)

御郡奉行達

左之通相願候段、内々申達

出石郡下郷大庄屋

宮内村 神床市郎右衛門

鳥居村 野村新兵衛

今般之御一件ニ付、重キ御慎被為蒙仰之処、右兩人

并触下村々庄屋共ハ勿論御百姓小前ニ至迄百数十年
格別厚キ奉蒙御恩沢候付、一統無ニ入奉恐入候、依
之奉恐入候御義ニ御座候得共、此節之御伺奉申上候
証迄ニ聊之品献上仕度奉願上候、并庄屋共御百姓共
同様小前之者も同様之心得を以、手業之品成共奉獻
上仕度趣、是又奉願上候、願之通被為仰付被成下候
得は、冥加至極難有仕合奉存上候、是又旧冬ノ格別
ニ御物入も被為在候御儀と奉恐察候付、此上相応之
御用被為仰被成下候ヘハ、重々難有仕合奉存上候、

二月二十五日

(同内容に付、文章を略す)

養父郡網場村

渡辺太兵衛

(天保七年二月二十九日)

(同内容に付、文章を略す)

出石郡宮内村

惣持寺

(同内容に付、文章を略す)

生野御支配所山之中中山村

三郎右衛門

(天保七年三月五日)

出石惣町

名主・庄屋共

(同内容に付、文章を略す)

(同内容に付、文章を略す)

下郷森尾村

平尾源太夫

(同内容に付、文章を略す)

山之中大庄屋桐野村

幸太夫

藤森村庄屋
平石衛門

(天保七年三月七日)

(同内容に付、文章を略す)

山之中大庄屋赤花村

橋本八兵衛

美多郡大庄屋上石村

上坂左衛門

土居

上田九左衛門

(同内容に付、文章を略す)

美含郡大庄屋轟村

平四郎

(天保七年三月九日)

(同内容に付、文章を略す)

町方

御用達・同格共

伏見屋

次郎左衛門

惣町行事惣代

八木町

次郎左衛門

魚屋町

善左衛門

田結庄町

半左衛門

本町

佐七

1 滅知後の藩体制立て直し

宵田町

次郎兵衛

材木町

五郎左衛門

向町

小四郎

宗鏡寺町

嘉兵衛

新町

治右衛門

川原町

平兵衛

(天保七年三月十三日)

気多郡江原村

友田儀右衛門

(同内容に付、文章を略す)

(天保七年三月十五日)

八木町米屋

吉郎右衛門

(同内容に付、文章を略す)

同倅

弥太郎

気多郡三組

庄屋共

(同内容に付、文章を略す)

御百姓共

小前共

気多郡上石村

長楽寺

栗栖野村

大門寺

(同内容に付、文章を略す)

比垣村

比曾寺

土居村

長恩寺

(天保七年三月十七日)

養父郡大庄屋

小野山与惣左衛門

(同内容に付、文章を略す)

西村次郎兵衛

小野山善太郎

(天保七年三月二十一日)

(同内容に付、文章を略す)

水上村

長砂村

(天保七年三月二十五日)

気多郡中郷村

浄厳寺

(同内容に付、文章を略す)

引野村

明元寺

土洩村

専念寺

加陽村

浄教寺

(天保七年三月二十七日)

(同内容に付、文章を略す) 氣多郡市町村
善応寺

上郷村 頼光寺

(同内容に付、文章を略す) 大庄屋新兵衛粹 綱吉

(同内容に付、文章を略す) 養父郡宿南村 利兵衛

(天保七年三月二十九日)

(同内容に付、文章を略す) 丹後竹野郡大庄屋一分村 木村次郎左衛門

触下村々一同

(同内容に付、文章を略す) 氣多郡清令寺村 東楽寺

(同内容に付、文章を略す) 円通寺 円通寺

一派中

(天保七年四月五日)

(同内容に付、文章を略す) 美含郡 富森三郎右衛門

中野村 長 治部

丹後竹野郡触元 力石村

(同内容に付、文章を略す) 助右衛門 吉沢村 弥平太

(天保七年四月九日)

(同内容に付、文章を略す) 養父郡夏梅村 三郎兵衛

(天保七年四月十一日)

(同内容に付、文章を略す) 嶋屋 忠左衛門

鍋屋 八兵衛

中嶋屋 半兵衛

鎌谷屋 喜兵衛

三五 見舞品献上謝絶 (天保七年十月十五日)

左之通両奉行江申談

町在江

先般御慎中為御伺上ケ物仕度段申出、其砌達御聰、少分之品は御請可被遊旨被仰出置候処、其後追々米穀扨底、一統必至下及困窮候段被聞召、御心痛被遊候、依之折角之志ニハ候得共、上ケ物之儀ハ堅御断被遊候、併御受納同様志之処ハ厚御満足被遊候、次ハ去年来御

1 滅知後の藩体制立て直し

慎中何連も慎方宜、旁以取斗方も有之度処、於上茂必至と御差問（つかえ）ニ付、乍御心外不被及其御沙汰、輕少之御酒料被成下候間、頂戴可仕事

御郡中被下

銀拾枚

養父郡
氣多郡
美含郡

村々江

同貳枚

惣町江

金貳百疋

美含郡
香住組

前条之御趣意ニ候得共、其組合之儀ハ御祈禱仕、御札差上、品柄之儀故早速御受納被遊御満足候、依之輕少之御酒料分被成下候間、頂戴可仕事

上ケ物申出候
寺院江

(前々条と同意のため文章を略す)

三三 町人の三御門(追手・東・西)出入り手続き

(天保八年三月七日)

町方之者へ

平日 御城下稲荷江参詣之儀、朝六時ハ五時迄、三

ケ日は昼九時迄之事

一 諸杉江参詣之者、是迄之通不苦候事

但、参詣之節追手御門ニテ鑑札受取出入とも可致、尤三

ケ日諸杉参詣ニ限り昼九時迄ハ不及鑑札、九ツ時後ハ平

日之通可相心得事

一 内町御家中江用向ニ罷越候節ハ三御門ハ通路不苦候、

尤御門ニ鑑札受取、罷出候節も元入候御門江鑑札差

戻し、同所ハ可罷帰事、若し暮六時後ニも相出候節

ハ、其主人ハ送人相添可申候間、追手御門ハ可罷出事

但、暮六時後罷越候節ハ、追手御門ハ鑑札受取、罷帰候

節ハ、本文之通可相心得事

鑑札紛失致し候へは、過料尙實文差出可申事

右之通以來相心得候様、尤此ケ条之内前々申談置候儀

も有之候得共、猶又改右之通可被相触候、

二 御用部屋日記

三月

三七 銀札相つづれ申候(天保八年)

『語色記録書』川見禎一氏所蔵

御殿様御半地ニ付、銀札相つづれ申候、

百八拾石

御旗奉行

一札老笏を九分・八分・七分・五分・四分・三分と段

百五拾石

御郡奉行

々ニ直段落、末ニは引替へ無御座候故、老分ぐらい

百三拾石

御留守居

ニなり、仕舞ニは六、七文ニなる、天保八西三月およわり、七、八月頃ニはいよくつづれ切申候、

百式拾石

町奉行

三八 減知後の御役高定まる(天保八年十二月二十四日)

御勘定奉行

左之通被仰出候ニ付、御書付寄々為拜見候様御目付江

百石

御使番

申談、書付式通相渡候由、

奥御附

三百五拾石

御年寄

六拾俵

御小納戸

三百石

御城代

御中老

五拾俵

御代官

但、中老にて御用番相勤候得は、三百五拾石高被成下、

右之通御役高被成下候、右ニ付以来役被仰付候節、其

時之分中被仰出は無之事

仙石讀岐守

三九 通用三か月期限の銀札を発行

(天保八年十二月二十八日)

銀札不融通ニ付、拾匁札・五匁札来三月限之印を以差出候間、可致通用候、尤来四月朔日より引替可申候、

但、上納物等ニ勝手ニ差出可申候、

右之趣町在江申聞置、御家中御徳物等ニも差出候間、

相心得候様、席々江右々可相達候、

十二月廿八日

荒木玄蕃

御目付中

三〇 阿部・中川両侯の後見御免 (天保九年八月十四日)

七月廿一日

御年(老カ)中水野越前守様御退出江御留守居御呼出ニ付、河

野丹次罷出候処、公用人を以左之通御達、御書付御渡

被成候付、請取之御勝手江罷出御請之御使者相勤、暮

時過罷帰申達候由、

其方儀若輩之事ニ候間、家政向之儀、阿部能登守・中川修理大夫兩人申合、心附候様先達而相達候得共、最早其儀ニ不及旨相達候間、可被得其意候、

三一 出奔して荒木玄蕃を諫めた米木龍次の書き置き

荒木家文書(吉祥寺管理)

乍恐奉申上書置事

一 殿様御本知ニ茂可被為婦哉 か品 誠以御大

切之御時節、善悪共ニ且那樣方之御行跡ニ可有御座と奉恐察、何卒悪説不仕候様心配仕候得共、御評判

不宜奉恐入候、此上万端御慎被遊、万民婦伏仕候様、被遊候御事

一 御公辺向之儀ニ付、昨年以來御手拔之儀御座候様、

耕月院被申候、私も左様奉存候、此上何卒無御手拔、

御本知ニ被為婦候様、御厚配被遊候御事

一 晟寿院様御大切被遊候御事 (注)

一 若旦那様江御書物御手習等御進免被遊候御事

一 一家不治而御政事も相立かたたく奉存候、治太夫始男
女共難有御奉公相勤候様、第一之御儀奉存候御事

一 御暮し方之儀ハ御奥様并治太夫等江御任、万端御候
約仕候様被仰付、御頂戴高ニ而御暮シ方程々相立候
様不被遊候而ハ諸人帰伏不仕候、殊ニ御勝手方御勤
被遊、并ニ当年之年柄ニ御座候得は、成丈御人出入
無御座、御屋根又ハ御つくろい普請御見合被遊候而
極難之ものへ御すくい被成下候御事

一 御酒并御肴等之儀ハ何ニ而も差上候品ニ而御内わニ
而被召上、折節ハ治太夫・源八郎等御相伴被仰付、
御主從御和合之儀奉願上候御事

一 毎月四月十七日・廿四日等御大切之御日柄ニハ前夜
(日夕)
ヨリ御精進被遊候様仕度候、既ニ正月三日夜魚肉ニ
而大領御相伴被仰付、并御次へも御酒・御肴等被成
下、御賑々敷被遊候付、左京ニ類シ候様申もの御座
候、此後御慎被遊候御事

一 御二階御取崩し被遊候様仕度候、其儘ニ被差置候得

ハ、再御家ニ相たより可申と奉存候間、早々御取崩
し被遊候御事

一 御親類御願中并御困中御深切ニ御世話申上候ものハ
此節思召不叶儀御座候とも、御直ニ御志かり被遊候
而、いつ迄も御懇ニ被遊候御事

一 此節至り金談何角御世話申上、御意叶ひ候事而已御
用ひ被遊候而、思召不叶儀申上候ものハいつとなく
御逢ひも不被遊候様成行候儀、甚以不宜奉存候、此
上思召不叶儀申上候ものを御用ひ被遊候得ハ、御家
御長久と奉存候御事

一 且那樣御名日本国中津々浦々迄も通り居候御事故、
此上御大切、中々は迄ニも弥増候間、万事御慎被遊
御氣随無御座候様、諸人之諫免を御用ひ被遊候御事
一 源八郎(注)儀も天下美名揚候処、其後身持不宜、既ニ且
那樣御名ニもかわり候様之御事、甚不束至極ニ御
座候得共、又御召遣方も不宜候様奉存候、同人儀ハ
有力無力之如く、御用も被仰付候事無御座、元日御

1 滅知後の藩体制立て直し

益等も被成下須、夜分も余人ニ泊り番被仰付候故歟
と奉存候、何卒昼夜共御表罷出、相勤候様被仰付、
時々御用向被仰付、御懇ニ御召仕ひ被遊候得ハ、随
分御用ニも相立可申候様奉存候間、何分ニも帰伏仕、
相勤候様被遊候御事

一 文吉儀御若党役被仰付、昼夜共罷出相勤候様被仰付
候得ハ、源八郎・文吉・辰蔵・□□四人ニ而御間ニ
合ひ可申と奉存候、又御仕ひ方ニハ此上両三人も御
仕ひ被遊候而も、御間ハ合ひ不申候間、只々何連も
和合仕、難有相勤候様被遊候御事

一 きぬうば等ハ是迄御かんなんの御中ニ相勤居候もの
を御そり(箱)やく被遊、いま(略)上り候ものを御ち(箱)よう
あい被遊候故、何連も中あしく、詰る所、御上の御
為ニ相成不申候間、古きものを御用ひ被遊候得ハ、
一 統帰伏可仕候御事

一 治郎吉昨年私出府之節、内々申聞せ候所、一命を捨
御内用相勤候ものを、御帰り後深く御挨拶も不被遊

候ニ、藤蔵・安治等ハ何の御用相勤、御勝手通り被
仰付候哉、御筋違之様奉存候、上 御政事之儀ハ不
奉存候得共、且那樣御家政ハ甚以不宜候様奉存候間、
御改免被遊候御事

一 私儀、去ル(文政九年)戊午江戸御詰之節ハ罷上り候ハ、以来不
成一方奉蒙御高恩、冥加至極難有仕合ニ奉存上候、
且不調法之儀数々御座候得共、御慈悲ヲ以、無難ニ

相勤候事故、兼而一命を奉差上、御奉公相勤候心得
ニ御座候処、且那樣ハも極御内用も打明ケ被仰付、
乍不及相勤罷在候、当春以来思召ニ不叶御儀御座候

と相見ハ、御用向も不被仰付候得共、私ハ返(却)而難有
何卒源八郎御用ひ被遊候様仕度候得共、其儀無御座

外人江被仰付候、私儀不束之儀御座候得ハ、此儀不
宜候間、相改候様被仰付被成下候得ハ、難有奉存候
得共、只々御逢ひ被遊候を御迷惑之御様子、何共奉
恐入候、私儀ハ如何様被遊候而も御大事之儀、身ハ
粉ニくたけ候とも口外不仕候得共、又外々江も右様

御大事之御用被仰付候向も可有御座候と奉存候、若
左様之儀も御座候得へ、そのもの共ハ別而御懇ニ不
被遊候而へ、御大事を引出し候様可相成候間、御堅^(賢)
慮可被遊候御事

右之条々、御目通りニ而奉申上度奉存候得共、御用多
深々申上候儀も不相成、不願恐、書付を以奉申上、何
卒此上御用ひ被成下候得へ、難有仕合ニ奉存上候、并
大願之儀御座候ニ付、御暇も不相願罷出候儀、重々奉
恐入、今更御残多奉存上候、万一大願成就仕候上ニ而
再宿迄罷帰り、乍余所御機嫌奉伺候御儀可有御座か、
先ハ御暇乞ニ御座候、何卒御機嫌能被遊御座、前条奉
申上候儀、御用ひ被成下候得へ、難有仕合奉存上候、
乍恐心残ハ親共儀、年老て私而已力ニ仕居候ニ、何事
も不申聞、御内用向ニ而罷出候趣申置候間、若し如何
哉と御伺ひ罷出候節ハ、御内用ニ而被遣候趣ニ御申聞
せ被成下候様、御願申上候、且重々之御願ニ御座候得
共、年老候両親へ御不便を被[□]被成下候様、偏ニ奉希

上候、以上

(天保八年)
酉二月

米木龍次
定固書判

旦那様江
上

(注) 1 荒木带刀恒邦父主殿恒直の正室は成信院、後室

は冬雲院、次いで晟寿院、带刀は冬雲院の子、
晟寿院は带刀の養母に当たる。

2 源八郎は荒木带刀(玄蕃)家家来平井治太夫の息
子、天保六年仙石左京公裁のとき、主人玄蕃の
罪の釈明を志して出奔、寺社奉行所へ上書、公
裁後忠臣として賞揚された。『乙未記事』(桜井
勉著、一九二五年(大正一四)参照。

* 滅知後の藩体制立て直しに当たって、荒木带刀は筆
頭家老に任じられ、家政を指揮したのであるが、そ
の施政は不評で道徳的にも許されない行状の人であ
った。それを憂えて荒木家家来の米木龍次は、書き
置きを残して出奔し、带刀を諫めている。

三三 産物会所懸り初め (天保十年正月十二日)

産物会所懸初ニ付、掛り御役人共罷出候段御勝手方御
用人申達

*産物会所再開に向けて、準備にかかったことを示している。

三三 製陶業加入命令(天保十年正月二十九日)

今般新町焼物山、茜屋善左衛門ト相山
申付候間、同人と申合□□之者共江得
斗申談、追々繁昌致し国益ニも可相成
様可致出精、尤山方之儀名主小左衛門
三郎太夫江懸り申付候間、委細猶又両
人可申談候、

泉屋
六右衛門

先年ノ新町焼物山拜借被仰付、年来渡
世致し来候処、近年休山致し度旨申達
候得共、上ニ而ハ山方繁昌為致、追々
国益ニも可相成様被遊度御趣意付、今
般泉屋六右衛門江相山申付候間、同人
と得斗申合致出精、国産相増候様可取
斗候、尤右山方之儀右同断、

茜屋
善左衛門

今般格別之御趣意を以新町焼物山茜屋
善左衛門・泉屋六右衛門江相山申付候
間、其方共当分山方懸り申付候、申合
折々見廻等致し、山方之儀万端申談、
追々国益ニも可相成様、善左衛門・六
右衛門始山方一同出精致し候様可申談、
尚又心付之儀ハ従是も可申談事

名主
小左衛門
三郎太夫

三四 内職あつせん(天保十年十月十七日)

御家中并未々迄取続ニも可相成哉と、此度於産殖方内
職物仕立候間、望之面々ハ懸り御用人江可申達候、委
細は懸り御役人江承り合可申候、

但、品物相渡し置、出来相納候節代料相渡候間、猥ケ間敷
儀無之様相心得可申候、

右之趣御家中江各々寄々可被相達候、以上

十月十七日

原 司書

御目付中

三五 財政再建方、意見具申を命ずる

(天保十年十一月十五日)

御幕方御取縮之儀御役人共色々取調候へ共、此上銀式百五拾貫匁御減付不申而へ御趣法難相立、御館入之者共茂引請御世話いたし兼候付、一統心付之儀聊たり共御役ニ不拘銘々封書ニいたし、来暮迄ニ御目付へ差出可申候、尤巨細は入途承知致し度面々ハ元方御勘定江承合可申事

但、心付之儀封書ニ難書取儀も候ハハ、口演ニ而御用部屋へ申述可然候、

右之趣席ニ而各々可相達候、以上

十一月十五日

原 司書

御目付中

三六 関口齡助、再登用

(天保十年十二月二十八日)

関口程次郎
病氣ニ付名代

関口竜左衛門

父齡(也以下同)介儀蟄居被仰付置候処、今般格別之以御慈悲、蟄居御免被仰付候事

(天保十一年正月二十五日)

程次郎父隠居
関口齡介

右今日於御居間、御目見被仰付候由、

(天保十一年正月二十七日)

程次郎父隠居
関口齡介

御含之儀被為在候付、御雇初、御徒士頭格

(天保十一年五月二十八日)

関口齡介

再勤被仰付御長柄奉行格 御郡奉行・御町奉行・元方御勘定奉行兼帯・自他御融通筋之儀是迄之通、重ニ引請相勤可申、御宛行之儀ハ御含被為在候付、追而可被及御沙汰、勤柄之儀ニ付、当時御役高前之通、百五拾石高被成下、

三七 勝手方立て直し人事、御直書写

(天保十一年正月二十八日)

酒勾内記

原 司書

今般勝手方趣法筋之儀は内記老年之事ニ候間、司書江專相任候間、内記儀は老功之儀、夫々遂吟味手拔無之存込之処存分ニ取斗有之候存候、此段厚く相心得候様存候事

稲垣源五左衛門

森井彦助

酒勾彦三

其方共、今般勝手方趣法筋之儀ニ付而は、上下之間ニ相立候役柄、大切之場所とも被存候間、厚く申合、司書不行届儀并身分過失等有之候節は、無遠慮及心添相輔追々我等及安心候場合ニも至候様、精々可致粉骨様存候、此段急度相心得可申候事

元方

勘定奉行江

其方共儀ハ專融通筋大切之役柄、当時之趣法ニ而は
大坂銀主館入共ハ猶更格別之儀、近国銀主共助精ニ
無之而は難立行、火急ニは筋立候様ニ參間敷候得共、
精々以実意及対談、助精ニ依り公務を始暮方無間欠
様取斗申、追々我等及安心候様、幾重ニも粉骨ニ及候
様存候、関口齡介助儀ハ年来融通筋も相心得并旧冬年
寄共迄差出候存念書之趣、尤之筋ニ相聞候間、旁今
般兼而答申付置候廉々赦免之上取立、相用候付而ハ、
諸士江対し御訳合も有之、猶更此上身分相慎心得違
無之、我等眼鑑ニ外レ不申様、精々及粉骨候様、急
度相心得可申候、

右之趣書付を以申渡候間、我等心中も相察、此上勝手
方之儀ニ付、我等身分不行届候儀有之節ハ、無遠慮申
聞候は承届可申候間、何卒少も及安心候様取斗呉可申
候、申迄ハ無之候得共、何連も第一同役睦敷諸事申合、
一和不致候而ハ我等為筋ニも不相成候儀ニ付、此段も
厚相心得可申事

三六 在籍・離籍希望意見具申を命ずる御直書

(天保十一年二月四日)

今般申述趣意ハ兼而酉年ノ兩度迄書取を以我等存意も
 中間候通、勝手方趣法筋之儀ハ既先年變事後、(旧名酒匂清長衛)内記は
 江戸表江差留、(旧名荒本玄善)帶刀・主計儀当方江帰発申付、政事取
 亂し之簾々取治方精々致粉骨候得共、多端ニ相成居夫
 々行届兼候処江、去酉年致入部種々致心配候得共、得
 斗様子も不相弁儀、趣法筋相立候処ニ及兼、一昨年参
 府前ニも段々一統江も頼置、出府之上後見之向江示談
 之廉も有之処、帶刀頭取留守中之儀も申付置、内記儀は
 出府申付候而昨年帰城之上、夫々及承知候処、未趣法立
 之姿ニも不相見、実以日夜及心配候趣意ハ定而何共察
(候らわん)
 吳候半と存候、然ル処去冬取調吟味を詰候処、所領高
 ニ而配当格外ニ不足之趣、懸り役人ノ申出、進退如何
 共差配も難及、心痛至極、依之諸士ハ素々小役人ニ至
 迄、聊之心附たりとも年寄共迄申出候様申付候処、夫
 々心付とも申出候族ハ畢竟用不用は差置、我等存念も

察し呉、且常々心懸罷在候故と如何程か令満足候、然
 ル処去暮極々難渡之向も相聞候而懸り役人とも心配之
 趣申出候間、聊之借用銀も申付置候、尤当節何連も難
 渡左も有之候半と日夜及心配候ハ、全公務筋ハ一家中
 共之儀斗ニ而、然ル処我等儀幼年之節、御先代御早世、
 御父上之御膝下を相離連、数年江戸表ニ而生育ニ及ひ、
 漸乘出しも可致場合ニ相成、御父上御安心も可被遊、
 我等も入部之上ハ御父上を相慕ひ、家格先例も洵底相
 伺、政事取斗ひも可致存候処、斗らず御父上御逝去被
 遊、引統右之變事逢候而左右可頼方も無之、及当惑候、
 依而君臣父子之情合も相察、幾重ニも其方も不便ニ存
 候、艱難之時ハ臣ハ君ニ子ハ親ニ取すかる筈ニ、其段
(録)
 ハ深く察居不無理事、其上高録之者共ニも当時渡物等
 も格別減少ニ取斗居候趣ハ素々存居候得共、格別之役
 儀広格等も申付置候族共ハ、銘々其心得も可有之事と
 存候、尤貧福ニは上下之差別も無之候得共、年来銀主
 江格外之願助精候処、不義理斗りと一向筋立も不致、

漸と公務を相勤候儀、銀主共へ及承場も有之、何れも我等心底致深察具候趣之処江、右之成行ニ而ハ如何とも我等心中も治兼候訳合、得斗勘弁ニ及ひ呉度事ニ存候、乍併是迄之儀ハ是非も無之間、此上ハ急度相心得呉、格別之役儀支配等も有之向ハ支配下江対し候処も可存候、小身之ものたりとも譜代士列ニも召仕候者ハ取立、又ハ新参之族江対し君臣之情合、忠義之筋も際立候様ニ常々相嗜呉度事ニ存候、其以下小役人之者共とても同様之心底ニ有之度、此度原司書以下懸り役人共格別減法趣筋申付候間、幾重ニも不便至極残念ニも存入候得共、減し口相立不申而ハ銀主向出張手代共も致し呉不申、旁右ニ付而ハ大坂館入銀主出張手代共近国銀主共江も御先代ノ余り格例も無之候得共、居間向ニも呼出再度頼入候挨拶等ニも及候儀、我等心中之処察具可申、畢竟右とても公務と其方共不便ニ存候間之事ニ候、向後勝手方出高多し儀候ハハ、我等身分心得違も相見ヘ候ハハ、無遠慮可申出、幾重ニも聞届可

申候間、此段も承知可致候、右体手詰之時節ニは候得共、何れも不手離サ有之候間、此書取之趣意并此末其方共心附筋老人つゝ膝元江も呼出、存込之儀承度存候得共、多人数之儀ニ付、年寄共ノ日限可申付候間、今一応封印を以、存念申出候様存候、

二月

御諱

諸士共江

今般御直書を以被仰出候御趣意、一統得斗奉念察、此末格別之御減法被仰出、如何様之及艱難候共、御先途御見届申上候存念哉、又は如斯御難渋之中多人数罷在候而御益介も御厭申上、他家奉公望又は他所稼茂致し度向も有之候ハ、畢竟二君江仕候儀、臣下之有之間敷場ニも可存候得共、当時之御成行ニ而兩端とも聊不忠之筋ニも不被思召候様被仰出候間、兩端之存念可被申上候、尤此度之儀は代筆ニ而も不苦思召候間、其旨相心得、来ル七日迄ニ御目付を以御用番迄可被差出候、

二月

三九 新抱の小頭以下、解雇の御直書

(天保十一年二月十五日)

小頭以下之者共
支配頭江

先日以書面趣意申述候通、減法ニ無之而ハ我等身分ハ難立行、畢竟此節少々之補ひ之手段ニ而年月を追候とも、押詰上下共及衰頹、進退停止之場所ニ茂(候らむ)至り候半と懸り役人とも茂相嘆候段、尤之儀ニ被存候間、幾重ニも不便千万ニ存候得共、今般天明年中以來新抱之小頭以下之者共、暇差遣候、全体小頭以下御一代限り新抱ニも有之候間、其心得ニ可有之、乍併当惑之条も深く察入候間、一ヶ年分之任給割合ニテ差遣候様懸り役人共江も申付候間、何卒此節右を以取続渡世ニも及ひ候様致し度、実以不得止事成行、厚く遂了簡、主従之間是又無甲乙精勤・忠節之族共ニ付、其身一代之内ハ領内江も及住居候ハ、帯刀之儀ハ是迄之通りニ差

赦候間、手近ニ罷在候て入用之節、又々相雇も致し遣度、且何等之節ハ早速罷出、我等助力致し呉候様、此段厚く相心得、支配々々へ申渡候様存候、

小役人江取立候
侍共江

其方共儀、先日以書面趣意申述候而存念を承り候処、夫々以封書存慮之趣申出、頼母敷儀共厚令満足候、何連も年来精勤之廉ニ寄、士列江取立候、以來も追々出精・昇進も為致者共も有之候処、先日以書面趣意申述候通、減法取斗申付候ニ付而ハ、天明年中以來之新抱之小頭の暇差遣、夫々繰下ニ而不手離、召仕度存念ニ候、尤三代迄も士分江取立候ものハ先ハ家督之節直様士分江も申付来候廉も有之候得共、其儀ニ不拘小役人江申付候、乍併追々出精・忠勤之上は士列江取立候事ニ候、尤中ニハ心外之筋とも存候向も可有之候得共、減知ニ付而ハ半分ハ人減シニも及ひ候筈ニ候得共、何卒君臣合體ニ而如何様之艱難も可致と存込候上ハ、一己之不肖

1 減知後の藩体制立て直し

ハ了簡も致し呉度存事ニ候、乍併ケ様ニ繰下候共、渡物等相応ニ致し遣候ハ、堪忍之場も可有之候得共、右等之処ニハ中々難及趣、懸り役人共申出候間、無是非次第及心痛候、此段深く相察勘弁致し呉可申候、乍併此上追々減法之模様ニ寄り、若シ又為取統他家江奉公も致し度所存ニ押移候ハ、何時も其旨無遠慮可申出候、其節ハ先方へも年来無疎意実体ニ忠節之趣ハ申届、被召仕候様可申遣、勿論他家江罷越奉公筋不応心底節罷帰候とも、当方ハ付届け候廉、武士道を相關候ハ、何時も当時之姿ニ而再召仕遣し可申候間、此旨可相心得事

小頭以下ハ小役人江
取立候者共江

其方共儀、先日以書面趣意申述候而趣意を承り候処、夫々封書を以存慮之趣申出、頼母敷儀共厚令満足候、何連も年来精勤之廉之分小役人江取立候処、先日諸士江以紙面趣意申述候儀承知之通、減法之取斗申付候ニ

付而は、天明年中以來新抱之小もの暇差遣、人数繰下召仕候心得ニは候得共、其身を繰下候儀者当時之成行ニ而ハ定而頓着も致し呉間敷は候得共、我等心中難黙止、不平ニも可存不便ニ存候事ニ付、身之儀ハ先は其儘差置候間、何卒子弟之者共人数入用之節ハ無給ニ而差出呉候様頼入事ニ候、尤年分召仕候儀ニハ無之、其折々相雇候事ニ候、尤当時之渡物ニ而ハ山野之稼等ニ而相凌居可申、右等之処日を支へ候段ハ氣之毒ニ候得共、何卒無間欠差出呉候様存事ニ候、此段支配頭ハ可申渡候事

諸士并
小役人共江

其方共儀、先日以書面趣意申述候而存念を承り候処、夫々封書を以存念之趣申出、頼母敷儀共厚令満足候、尤譜代恩顧之者共ニ候得は取立、且ハ新参之者江対し励ニも相成候様、君臣之請合忠節之筋相嗜呉度と申述

候場所、呉々厚相心得、此度滅法之取斗申付候ニ付而ハ、乍氣之毒一統渡物之内此上借受候間、此段相心得可申候、依而は小もの共暇差出、繰下ケ召仕候得共、大祿・大祿(少カ)ニ不限譜代之者ハ格別ニ存候間、格席其儘召仕度とも存込候事ニ候、且子弟之者共ハ兼而神妙ニ申出候廉も有之、下分之勵とも相成候様、一己之不肖不拘、人少之節ハ小者之勤所江も差出呉度頼置事ニ候、呉々も当時之成行、此末其方共先途も一向見通候事も無之、誠ニ落儀之至、能々察し呉可申候、我等心底と其方共所存と行違候と申ニは無之、御治世ニ浴し候段ハ同様難有事ニハ候得共、畢竟御治世之訳ニ而君臣之間、自然疎意勝ニ成行候段心外ニ存候、尤此上之成行ニ而無抛君臣相離候場合ニ推移り候とも、新古ニ不拘何連も忠節精勤之族不殘召連、当家格例之追鳥持相催し、我等馬前ニ相立候姿をも致一覽、其上存意も有之候得共、当時勝手方役人共江申述候儀も相厭、且又銀主共江対し候訳合も有之、及心痛候、乍併武器之儀は

格別手前不用之手段具壳払候間、入用筋取賄候之間、手配都合出来次第候ハ、雪解次第持場申触候存念ニ候処、斗らす公儀御中陰ニ相成、其内ニハ参府前ニも近寄候間、来年帰城之上可申付候間、其心得可罷在候、右ニ付手当金差遣度心附之処、不能心底、我等手元ノ寸志迄之心附差遣候、猶年寄共ノ可申談事

二月

御諱

一分而申付置候は、今般申渡候書取之内、新古之差別小諸城ノ上田城江召連候もの小者ニ至迄、旧家と相心得、上田表ノ当城江召連候者小者ニ至迄、古参と相心得可申、移封後百年祝井之節粗(マ)其趣意も一統相心得可罷在候、尤当城以来召抱又は別家等召出候者共、世代之内格別之忠勤ニ而中老以上江申付候家柄は、古参ニ可準候事

一小役人ノ士分ニ取立候者とも、格別之御赦ニより、目付格以上江昇進申付候者江ハ家督之節士分江可申

付、小頭以下より取立候而小姓組以上ニ昇進申付候者
江ハ、家督之節小役人ニ可申付事

三〇 関口齡助、札場・産物方懸り

(天保十一年二月二十六日)

伴 四郎左衛門

関口齡介(助)

今般御改革ニ付、札場・産物方懸り引請被仰付候ニ付
而は、以来越別遂心配、当国之産物ハ養蚕之儀第一に
候間、御領分ハ素々一国之利益も一段相増候様大坂引
受之面々へ得斗申談、強き産物会所利益筋而已ニ不抱、
下分都合宜様取斗、他所向(軒)以下同へ利益筋相運候様ニ而ハ畢
竟産物会所衰微之基にも可相成ニ付、此上不締筋之儀
無之様法度之儀嚴重ニ取斗、融通筋之儀ハ精々手広ニ
相成候様、専要ニ可相心得候事

二月

三一 木綿問屋許可 (天保十一年二月二十九日)

木綿問屋

八木町中屋 治助
養父市場村 貢平

右之者共、依願渡世方之一助にも可相成と、木綿問屋
差赦、当分於中屋治助宅致問屋候、不都東之筋有
之候ハハ問屋之故障ニも相成候間、万一心得
違急度可及其沙汰事
右之趣、町在江可被相触候、

二月

三二 他所銀札通用停止令 (天保十一年二月晦日)

先年御都合之儀有之、当分之内他所銀札通用不苦旨
申触置候処、今般以前之通通用停止申付候、乍併差
問之筋も可有之ニ付、来三月十五日迄被猶予候間、
右日限迄ニ捌(令)仕廻可申候、若し日限
答メ可申付候、

但、豊岡札之儀ハ追而以日限停止可申付候、

一去ル酉年差出候大坂加印札引替残之分、来ル三月十

五日限、弥通用停止申付候間、早々引替場江差出、引替可申候、

二月

二四 旧領村々、年賦金上納 (天保十一年三月七日)

一 御郡奉行達

御旧領村々向、年賦金為上納左之輩為惣代今日御殿へ罷上候、

白木箱入
杉原包水引懸ケ
金式百疋

養父郡夏梅村

大屋市場村

中間村

宿南村

気多郡栗栖野村

万場村

地下村

江原村

勘右衛門

平兵衛

太右衛門

利左衛門

治郎兵衛

吉兵衛

源次

利助

勘右衛門

仁平次
国分寺村

豊右衛門

土居村

九右衛門

一 右ニ付一同三之間江置居、御郡奉行・御代官共出仕、御年寄北之方御椽影ニ南向ニ着座、殿様三之間御敷居際迄御出、立所御郡奉行伴四郎左衛門披露、御意有之、同人御取合仕相済被為人、

(天保十一年三月十七日)

三十五両

美含郡中野村

七郎兵衛

仁左衛門

*美含郡惣代として罷上る。藩の対応は前者と同じ。

二四 領内大庄屋らによる勝手方融資組編成

(天保十一年四月十九日)

一 左之御規定書之通御仕賄之儀調談被成候付、左之向

々江於御三之間ニ、用番々及挨拶、

但、大坂表之儀ハ弥助婦坂中留守ニ付、調談被申所ニ不参候得共、何れ弥助此表出張候へは及議ニ候事、但、

五月末頃調談ニ相成候事

鍋屋 庄助

森尾村

源太夫 源藏

赤花村

八兵衛

広谷村

保左衛門

高柳村

宗右衛門

小城村

善右衛門

右当時、御直裁之姿ニも相成候付、右調談之儀江戸表江相伺候上印形可致処、兼而右之趣は、於上茂御承知之事、且江戸表へ相伺候上ニ而御婚姻御役当り御入用金出金為致可申処も手後れニ相成候付、先及印形、後使其旨江戸表江申達可申、其旨相心得候様勝手方御用人江申談置、

相渡置相對一札之事

一 今度旦那勝手方仕賄之儀御頼申入候処、預御承知致

大慶候、然ル上は別儀仕法帳之通、年分入用江戸送り金之儀ハ、大坂館入銀主御出金、国元入用金之分ハ近国并領分手組御出銀被下候約定、尤返済之儀ハ年分収納辻米・大豆・小物成等不殘相渡可申間、村々役人共別紙証文為差入候間、直ニ御請取御免払可被成候、別紙帳面之外、臨時御公務ハ大坂表ニ而御引請、其外趣法帳面之内臨時筋は近国領分手組御割合御引請可被下候、其余之儀ハ御一統江聊も御頼談申間敷候、為後日役人共連印証文相渡置候処、仍而如件、

天保十一庚子年正月

勘定奉行

関口角右衛門

麻見弁之助

舟木六郎左衛門

関口 助 介

乘 竹 弼印なし

金沢源之進

郡奉行

竹村源左衛門

二 御用部屋日記

鑑屋
 龍三郎殿
 笹屋
 勘左衛門殿
 鏑屋
 六兵衛殿
 雜喉屋
 三郎兵衛殿
 嶋屋
 市五郎殿
 備前屋
 徳兵衛殿
 大坂屋
 徳右衛門殿
 丹後宮津
 嘉兵衛殿
 岩滝
 市左衛門殿

用人

伴 四郎左衛門 ㊦
 酒 勾彦 三 ㊦
 森 井彦 助 ㊦
 早川 庄兵衛 ㊦
 増田 藤 助 ㊦
 渡辺 喜左衛門 ㊦
 長岡 右 中 ㊦
 稲垣 源五左衛門 ㊦

湊宮村 林 蔵殿

豐岡 又兵衛殿

森尾村 源太夫殿

赤花村 源 蔵殿

広谷村 八兵衛殿

高柳村 保左衛門殿

小坡村 宗右衛門殿

善右衛門殿

右之通相違無之也、

酒勾内記 ㊦

服部弥兵衛

原 司 書 ㊦

一柳 亘理 ㊦

河合庄左衛門 ㊦

銀子借用証文之事

一 銀三百貫目也

右者御領主様御定用金御仕賄御引受被成候付、今般

御取納辻米・大豆・小物成等不残為御任相成候付、
右方江私共々直渡可仕候間、各方ニ而御取捌、元利
銀御請取可被下候、万一不時変儀等出来仕節ハ、村
々家別ニ取集、聊無遅滞、来ル十一日限元利共皆済
可仕候、為後念、御手組外大庄屋并村々役人連印銀
子借用証文仍而如件、

町分大庄屋

大橋又十郎

橋本惣左衛門

橋本小左衛門

長良三郎太夫

下郷大庄屋

神床市郎右衛門

野村新兵衛

取締庄屋

袴座村 善 太夫

香住村 又右衛門

下鉢山 七右衛門

尾崎村 文右衛門

山之中大庄屋

福富甚太夫

国村又右衛門

多根勘三郎

取締庄屋

下村 治三右衛門

日野辺村 三郎太夫

中藤森村 平右衛門

小坂村 治郎左衛門

養父郡取締庄屋

養父市場村 幸右衛門

高生田村 太兵衛

浅倉村 市郎右衛門

国木村 吉郎右衛門

名前

大坂七軒

他向四軒

御領分六人

*村々に残る証文は頭書部分が次のような記載になっ
ている。

銀子借用証文之事(「米里村御用帳控」)

一 銀三百貫匁也 大坂御請様江戸御差立之分

一 銀三百貫匁也 御手組御出金御国方御定用之分

『御用部屋日記』には、御手組出金部分は省略して記載されているのであろう。

二四 村々庄屋、年貢大庄屋直納を約束

『米里村御用向控帳』 八鹿町中央公民館蔵

村々収納物不残相納候一札規定之事

一 此度御上様御勝手方御趣法御立被為遊候ニ付、御仕賄之儀、大坂近国御館入并御領分手組引請ニ相成候ニ付、村々御上納物大庄屋所へ不残相納、大庄屋の其々仕賄人別へ御算用ニ相成由、左候得は是迄之所茂大庄屋所へ相納来り候得共、猶又入念諸色御差雜物ニ而も大庄屋相对済無御座候而は、聊^(儀)義ニ而も引去り算用毛頭仕間敷候、右為後念、村々庄屋組頭印形仕、規定書相渡候、依而如件、

天保十一子四月

高柳村	米里村	国木村	小山村	朝倉村
舞狂村	上小田村	下小田村	伊佐村	
浅間村	赤崎村	浅倉村	坂本村	

(以上各村庄屋組頭連名)

大庄屋

福田宗右衛門殿

取締庄屋

市郎右衛門殿

吉郎右衛門殿

二四 糸問屋登用 (天保十一年四月二十二日)

一 町奉行達

当老ケ年限り産物方糸問屋

博勞町

奥山屋

申付候、以来入念出精相勤

宵田町

嶋屋

次郎兵衛

可申事、委細之儀へ、

元方御勘定奉行の可申談事

二五 産物会所再開令 (天保十一年五月初日)

先年より格別之御趣意を以、産物会所取建置、下分を融通糸・穀物類其外国産之品々引当、御貸付有之来候処、近來不手繰ニ付、御自力行届兼候得共、下分不融通之処も御厭被遣被下、今般大坂表江対談を以当六月より

1 減知後の藩体制立て直し

前之通、月割老歩五厘之利足を以金銀札望之品御貸付有之候間、格別之御趣意厚相心得、国産之品産物会所江相運ひ差入、拝借銀致し、他国他領筋江利益打失候儀無之様取斗、時節相場見斗、一統得利潤候様專要之事ニ候、

五月朔日

(天保十一年五月九日)

御勝手方

御用人江

今般産物方之儀、元方御勘定奉行引請申付候得共、伺筋之儀は其役方を以可申達筈ニ付、其旨相心得、心付之儀も可被申談候、尤産物方江御勘定奉行罷出、金銀出入等取調候節、折々其役方も罷出、帳面逐吟味、御締筋厚く可申談事

町在江

今般産物会所ニ於て、以前之通糸間屋申付候間、糸売捌之儀は産物方問屋江持出し可致売買、自分宅にて売買之儀令停止候、尤壺買之儀ハ不苦候、若心得違之族

有之節ハ吟味之上急度答メ可申付候事

『米里村御用向控帳』

八鹿町中央公民館蔵

先般申触候産物会所御貸附銀利足之儀、日廻し老歩ニ付三分五厘の積り、老ケ月拾匁五分ニ候、是迄は老歩式之処、今般格別之御趣意ニ而右之通御引下ケ被成下候儀、心得違罷在候族も有之哉ニ相聞候ニ付、為念、尚又申達候、小前迄不洩様、得斗可被申談候、右之趣村々江可相触候、以上

五月十二日

中村小次郎

三〇六 関口齡助再勤(天保十一年五月二十八日)

再勤被仰付、御長柄奉行格、

御郡奉行、町奉行・元方御勘定奉行兼帯 関口齡助

自他御融通筋之儀是迄之通、重ニ引請相勤可申、御宛行之儀ハ御舎為在候付、追而可及御沙汰勤柄之儀ニ付、当時御役高前之通百五拾石高被成下、

三〇 掛屋任命

『小城村御用留』 養父町民俗史料館蔵

宮津
山本嘉兵衛
湊宮村
小西 林 蔵
岩滝
千賀市左衛門
豊岡
竹屋又兵衛

右之面々今般御掛屋被仰付候ニ付、諸上納物都而右之方へ相納、受取書取、右書付を以、是迄之通り銀納場へ相納、御勘定を遂ケ候様村々庄屋へ不洩様可被申被下候、

御掛屋 大手前北側

東角

子五月

御郡奉行

関口 齡介(幼)

岡部鉄五郎

太田忠三郎

五月晦日御触

三一 糸抜買・他領銀札使用者処罰

(天保十一年六月十五日)

糸売買之儀、産物方糸問屋江持出し、宵田町
取扱可致処、一昨十日於自分宅致売買、平兵衛
申付を相背、不届ニ付、追込

右同断、致抜買候付、追込
同町
米屋
六兵衛

但、十四日赦免

右同断、直買候中人ニ相立候付、
河原町
百合町
与次郎

叱り

三二 産物会所糸問屋再開、再度申触

(天保十一年六月二十日)

町在江

今般以前之通於産物方問屋申付候付、糸売買坪寄之外は問屋江持出候而売買可致旨申触置候処、御趣意難吞込儀有之候哉、心得違之向も相聞候、畢竟下分融通為筋可相成と利下ケ□申談御貸付、他邦江利益相失ひ不

申様ニとの御趣意ニ付、右之趣得斗相弁江、問屋江差
出相場模様ニ寄、見合、損失無之様取斗可申候、此上
御趣意ニ相背、心得違之族於有之は、糸落取上吟味之
上多少ニ応し過料可申付事

三五 塩株取り戻し營業再開願

(天保十一年七月二十二日)

材木町
大坂屋
弥右衛門

右塩株先年塩商売相休候節、田結庄町西嶋屋善吉江預
置候処、此度取戻塩商売仕度旨相願候由、故障も無之
候ハ、勝手ニ申付候様申談、

三五 他所銀札使用により処罰

(天保十一年七月二十六日)

他所銀札当時通用罷在、
八木町
森尾屋
源五郎
不都束^(ふつつか)ニ付、追込

三五 銀主直納を条件の融資組停止命令

(天保十一年九月十日)

一 今般原司書江戸ノ罷歸候処、御直書を以被仰出候御
趣意有之間、於御用部屋左之通申渡
御直書左之通

勝手方諸役人共江

今般原司書召寄申談、森井彦助差添帰発申付候趣意、
何連も得斗致勘弁承り可申、兼而當春参府前書取を以
申述候通、去戌年在府留守中帶刀頭取ニ而趣法筋差配
為致、昨年帰城後夫々承り糺し候処、兎角趣法筋も難
相立趣ニ付、昨年中も種々心配ニ及ひ候而、當春参府
前漸少々減法筋際立候処も有之候得共、間も無之発駕
ニ相成、依之勝手方趣法専司書老人江相任セ置候儀、
且又出立前大坂手代共并近国銀主共之内へも別段及面
会、深く助精相頼置候廉も有之、既ニ大坂表之儀ハ一
切不義理之取斗有之中、当年中仕送之儀押而役人共ノ
及対談候処、此度品々趣意合申述候上、懇談之次第勘
定奉行迄申遣候書面之趣、一々可申所も無之、尤之次第、
近国銀主共も実意を以助精ニも及呉候様子、且又参府

前々此節迄余程之出銀之趣は至極令満足罷在候処、此度手組規定書之趣共司書ヲ申達及懇談候処、年々收納米村々役人共印形を取置取ニ可及之趣ハ、不附其意申分と存候、右等之儀ニ候ハ、畢竟無縁之者之取斗、名目銀同様之儀、聊実意之筋トハ不被存候、且又司書以下諸役人別而三奉行之者共は如何相心得候哉、拝領高三万石收納之儀ハ、公儀歩役差出し家中扶助ノ当時公務筋手当之諸幕方入用辻配当差配之為、三奉行始諸役も申付置候儀、然ル処收納米者元ノ小物成迄不残直渡し之証文江下分小前之者迄調印為致、手組他領之者共江相渡候取斗、(計以下同)近国ニ対し候所も有之儀、我等心中も相察可申、畢竟近年引続災害相添ひ候ノ勝手方手段も果候段ハ深く了簡も致し、氣之毒ニも存居候得共、右様ニ威敵も相失ひ罷在候ノ追々近領ノ不法之取斗等も有之哉ニ承り及ひ候儀も有之、我等ニ於ても残念之次第、何連も同様事ニ可有之間、此旨能々相弁へ、且我等存慮も有之ニ付、大坂表并近国銀主共へ是迄之出

銀方、先ツ来年帰城迄之処不及返済候間、相断可申、断方ハ司書以下勝手方役人共分別ニ可有之、收納米之儀、当年分之處不残取立置可申、且從此節幕方へ相賄候余ハ夫々遂勘定、来年帰城之上手元江可差出、尤減法筋者猶亦申付儀も有之候間、無手拔取斗可申、若又領分之者不納筋有之節者、法令之通急度可申付、此旨相心得可申候、且又参府前近国銀主共ノ此上人減し之儀も申述候向も有之由、右は申迄も無之減祿ニ付而者分限ニ余り候多人數、此分ニ而も難相済段は何連も不申共相知れ候儀、彼等ノ申出候儀助言ニ預り候段心外ニも存候得共、乍併是ト申も我等立行候趣意得斗分別ニ及ひ、此上聊無懸念可存精勤、郡中・町方之儀も分而不申付候得共、近来何となく制度筋收納方不行届も相聞候、夫々申合帰城迄ニハ急度際立候様、是又及分別可申事

子七月

二五 関口齡助の不行届、此度は沙汰に及ばず

(天保十一年九月十日)

一 左之通御勝手方懸り河合庄左衛門御用人を以御達にて申渡之、

関口齡介^(助)

兼而格別之御舎を以、融通筋之儀引請、相勤候様被仰付置候処、此度不行届取斗有之候得共、先此度ハ不及御沙汰候、此上入念相勤候様被仰出候旨、

一 左之通御郡奉行へ申談

(天保十一年九月十一日)

名主
大庄屋へ

今般從江戸表御直書を以諸御役人へ被仰付有之ニ付、是迄大坂表自他御借材当分之處、元利置居御頼被仰出候付、当春大坂并近国御領分手組江当御收納米・御小物成迄直渡し対談ニ及び、村役人共江申付調印

為致候得共、右ニ付御勝手方可及対談候間、聊未

進無之、前々之通可遂上納、若し心得違不納族は手

当可申付、則御直書之写拜見被仰付候間、慎而拜見

いたし、以来上納筋之儀心得違無之様急度相心得可

申、并御掛屋之儀も先般申付置候得共、且又前々通

御勘定所江相納候様、此段村々江可申談事

二六 納所奉行出郷取り止めを求める願書

(天保十一年十月八日)

左之通相願候由、願之通可申付哉相伺候付、願之趣無余儀事ニも相聞候付、願之通申談候様申談、

一 当御收納方之儀、御納所奉行中様御出郷被遊、於村

々御米斗立被仰付候上、御蔵持可仕旨、先般被仰出

御座候ニ付村々一統江申談候処、右様ニ相成候而は

第一御百姓共疇上麦蒔等ニ而農業等忙敷時分大ニ手

間潰ニ相成、村役人共は御勘定前何角と繁多之折柄

御出郷御奉行様対談候而ハ、手挟^(袋)之場所江疇上之束

稻、斗立之御米、置処も無之迷惑至極奉存、且村々余分之失費等も相懸候儀故、旁難渋迷惑至極奉存候間、何卒是迄之通り被仰付被成下度段、再応以書付奉願上候処、御嚴重ニ御理害被仰付候上、願書御差下ニ相成り、一統無ニ入罷在候処、当分之處ハ御藏納可被仰付旨追而被仰出御座候付、一統難有奉存、少は安心之姿ニ奉存居候処、此度下郷尾崎村江御奉行様御出郷被遊候由、尾崎村之小前末々之者共迄奉恐入候、此上外村々江茂被遊候而ハ奉恐入候儀付、何卒此上御米藏詰之儀は格別出精致し、兼而御定之通霜月十五日限り急度皆済可仕候間、御奉行様御出郷之儀ハ幾重とも御赦免相願具候様村々役人共ハ不及申、御百姓小前末々迄一同申出候付、猶又不願恐御愁訴奉申上候、兼而御嚴重ニ被仰付候御趣意之處は、銘々共ニおいても承知乍仕、押而奉願上候段重々奉恐入候得共、前段奉申上候下分難渋差支之筋深く御汲取被遊被成下候様、不惡御聞上之上、願之通御

奉行様御出郷之儀御赦免被仰付被成下候様、兼而御定之日限迄ニは銘々共御請合申上、無遅滞御蔵入為仕可申候間、何卒願之通被仰付被成下候様奉願上候、右願之通御聞済被成下候ハ、下分一同冥加至極難有奉存候、以上

天保十一年十一月

下分大庄屋

鳥居村

野村新兵衛[㊦]

同森尾村

平尾源助[㊦]

山之中大庄屋

橋本八兵衛[㊦]

口赤花村

同日野辺村

国村又右衛門[㊦]

村山茂助様

亀井雲八様

三五 豊岡札通用は来る大晦日まで

(天保十一年十二月二十二日)

曾て他所銀札通用停止申付候得共、豊岡札之儀差聞之筋も可有之ニ付、先其儘通用申付置候得共、中ニハ胡[㊦]

1 滅知後の藩体制立て直し

乱成銀札も間々有之哉ニ相聞候ニ付、来ル晦日迄ニ取揃仕廻、来丑正月ノ通用致間敷候、此旨町在へ相触候間、御家中とも同様相心得候様御□荒木帶刀・仙石内藏介同席、御留守へも申置候、

三六 再雇用の小頭以下

(天保十二年正月十八日)

小諸御抱之

小頭以下

右世代之内一旦切目有之輩、先達而勤方御用捨候処、古家筋之者共ニ付、格別之思召を以御抱ニ准し勤方被仰付候事

一天明以後切目有之、先達而御暇被差出候輩、是又御抱ニ被仰付候事

上田御抱之

小頭以下

右世代之内一旦切目有之輩、先達而勤方御用捨之処、格別之以思召、宝永御抱ニ准し御雇被仰付候事

一天明以後切目有之、先達而御暇被差出候輩、是又御雇被仰付候事

雇被仰付候事

三五 友鷲(神谷転)御館入御免(江戸よりの報)

(天保十二年五月十八日)

五月朔日

一 左之通被仰出旨、頭取河野丹次へ申談、

松見寺看主

友鷲

右今般依願格別之以思召、御館入御免被遊候事

五月二日

一 扇子箱 一箱差上ル

松見寺看主

友鷲

右今般格別之以思召、御館入御免被遊候付、為御礼差出、御裏書院三之間へ相通し、御用人・御留守居罷出、及挨拶、畢而御年寄罷出及挨拶□於御小書院御目見被仰付、披露御書翰役、御取次御用人、相濟、於元席御吸物・御酒□被成下、

三〇 桜井一太郎追放(天保十二年九月十三日)

桜井一太郎

其方儀、不応家風ニ付、永之暇差遣候、せかれ三郎儀

も同様申付候、家族召連早速引込可申候、尤公儀御役人・親類中・同姓共江奉公并京都・江戸・但馬国徘徊相構候、其旨可相心得者也、

但、父迂叟儀ハ在勤中勤方之儀有之、追々及老年ニ候付、依願御用捨を以、城下住居可任勝手事

丑九月

三 一 玄蕃へ再度返答書提出を求めらる藩主糾問書

荒木家文書(吉祥寺管理)

返答書被差出遂一読候処、返答之趣意我等が相尋候趣意と致齟齬候廉々有之候ニ付、尚又相尋候、

初ケ条

其元加判之列ニ婦役後、行跡不得其意、義多端相聞候付、及尋候処、不肖之身分ニ而取斗不行届趣被相認候得共、不行跡之義(儀以下同)は不行届と申ものニハ無之候、

第一

天真院様御不徳ニ相成候義認込候書面を、当家為筋を存認候(注)と申義、不審之事ニ候、既ニ三右衛門が重(草也)

き御役家江右書面差出し、他方江も相頭候、右ニ而も為筋ニ相成候而君臣之礼儀相立候哉、詳ニ返答書可有之候、

第二

天真院様御住居、寺院は格別、下分江は遣し不申候様被申談候由ニ候得共、自他町人共江売払、他向ニ而は住居ニ致居候義眼前ニ候、然ル処何れ之不念ニ候哉、詮義も無之等閑之事ニ候、右ニ而我等孝道相立候哉、忠孝は人倫第一之義、我等孝道ニ相外レ候様之取斗被致、相濟候事と被存候哉、

第三

返答不得其意候無名之投訴体之ものニ如何心得候而上封被致候哉、且役義も無相動身分ニ而、目付役江再心焼捨被申談候心底甚不審ニ存相尋候義、然ルを手續而已被申出、相尋候趣意ハ一向返答無之、上封被致候趣意并再心焼捨被申談候義、急度返答可有之候、

第四

たわたり峠江誘引之節、途中ニ而用捨被相願候由被
申出候得共、森尾村休^(田多)之場所ニ而田立村迄先達ニ
而罷越居候趣ニ被申聞、其儘ニ而帰宅被致候義有之
候、右は相覚不被申候哉、

第五

法安寺池江罷越候節、前方被相断候趣ニ候へ共、何
付被罷越度趣之断ニ無之而は差合不都合有之候、既
ニ銀主罷越候砌は勝手掛り庄左衛門^ノ内記江相断罷
越候由、左も可有之事ニ候、畢竟其元江預ケ置候節
定断ニ而、勝手次第ニ罷越候向有之候而茂其儘ニ被
致置候心得と相見候、右ニ而は預ケ置メリ申付候詮
も聊無之事と存候、其元心得致承知候事

第六

省略取縮之心得ニ而被取払候由、左候ハ、勝手の方
以前ニ可被取払筈ニ候、然ル処、表向役用之場所取
払、却而自分勝手之場所は其儘有之候ニ付、不審申
出候処、其節は無之存外手^(扱)ニ相成、其上入用等も

多分ニ相懸候ニ付、其儘ニ差置候杯と被申出候義、
不得其意義ニ存候、左候ハ、是迄不申出候得共、一
ヶ条尚又相尋候、承り候処、従来勝手方懸り用人除
置銀有之、右は非常手当ニ致し有之趣之処、其元^ノ
用人江申談借用被致候由、多分之金高ニも相聞候、
其比勝手方ニ而は聊之義ニも差間、櫓方武器迄も少
分之金子引当ニ差遣候位之中、其元右等之銀子何用
ニ被遣払候哉、承知致し度事

端書、他言用捨ニ及呉候様被相認候義、如何様之心
底候哉、乍封書用番迄相下ケ、相尋候義返答之模様
ニ寄り年寄共江申聞候義は勿論之事ニ而、君臣之間
失礼之文言と心外之事ニ存候、心得承知致し度事、
右之廉々尚又相尋候、畢竟此間之書取、等閑ニ被心
得候故相尋候、肝要之処返答無之事と甚如何敷存候、
早々下ケ札ニ而再応之返答、秘封之上、用番迄可被

差出候、

(天保十二年)

九月

(注) 1 文書番号二一六を指すとみられる。荒木帯刀の

上書は河野瀬兵衛の上書とほぼ同意であるから、この簡条によって、藩主久利は、瀬兵衛の行為もまた仙石家にとつてよからぬことであつたと断じていると理解できよう。荒木家の親戚草川三右衛門は、天保十一年十二月三日「家風不応」の科をもつて出石藩から追放された。荒木玄蕃(帯刀)の書き置きを脇坂家の手の者に渡したと、これに加えて文書番号二六六野田恒太夫投訴状を内見したことが頭れた責めを問われたのであろう。

2 文書番号二六六、野田恒太夫が天保十二年十月十六日夜、追手門へ張りつけた文書を指すとみられる。

三三 荒木玄蕃返答書

荒木家文書(吉祥寺管理)

御書取御簡条之趣拜見仕候、御尋之御趣意と齟齬仕候廉々被為在候ニ付、猶又御尋、右ニ付、御書江下ケ札を以奉申上候様被仰付候得共、是又奉恐入候ニ付、別紙を以奉申上候、

初御簡条

御加判之列江帰役被仰付候後、行跡如何敷御下ケ墨之段、奉恐入候、

第一御簡条

此間茂申上候通、御為筋をは存、少し之心付認置申候処、田場入被仰付候節、差残置申候趣申上候処、御不審ニ被思召候得は奉恐入候、右書面を他方江相頭し候心得は無御座、聊之書付ニ而も御為筋ニも可相成候様時節は宣頼置候趣、取斗不行届段は奉恐入候、

第二御簡条

天真院様御住居御取払之儀は、此間茂申上候通、寺院等江は格別、下々江は差遣し不申様其懸り御役人共江申談し方不宜、不行届段奉恐入候、併同席共得斗と相談之上申談候儀御座候、

第三御簡条

無名之投訴体之ものへ上封仕、且御役儀茂被仰付置候事故、御目付江再応焼捨之儀申談し候訳合は、先

御役相勤候迎茂返役後之事故、御法之通り表向談し候節は焼捨と申談候儀ニ御座候、右ニ付、門者江も焼捨と張札仕事故、右之申談仕候心、心底へ甚御不審被思召候段、奉忍入候、

第四御箇条

たわたり御出之節、御途中森尾村御休ニ而御酒頂戴仕、段々御意ニ而数杯頂戴仕、左候得は迎茂御供難仕趣申上、御用捨相頼、蒙御免候と相心得候而御先ニ引取失敬仕候段奉忍入候、

第五

法安寺池罷越し候儀、前方相断置候儀は、(酒匂)内記申聞候は、此度法安寺池私江御預ケニ相成候間、無遠慮罷越候様申聞候ニ付、左御座候哉、左茂御座候は勝手ニ罷越し候而も不苦候哉之旨申聞候処、罷越候而不苦候趣申聞候ニ付罷越申候、私江御預ケ之節、御不メリ筋ニ取斗候心得は全無御座候得共、御メリ被仰付候詮茂聊無御座趣奉忍入候、

第六

省略取締之心得ニ而表座敷等取払之儀前後仕候取斗は奉忍入候得共、其節御勝手方御役人共々表座敷等取払候は、銀主向請も格別宜候間取払候様申聞候ニ付、内記茂同意ニ而相談之上、一所に申達仕取払候処、内記は不取払候、并拜借銀之義は元々難渋之処(儀)御変事前後彼是納入多、其後不斗再勤も被仰付候而は勤筋入用等も有之、勝手不如意之上、借材方何角困り居候処、御勝手方御用人共見受候哉、当分御除銀之内過年私兩人拜借致し候哉と心付申聞候ニ付、左候得は兩人共追々御宛行茂御直し被成下可申哉と奉存候ニ付、其節は追々上納可仕候間、先夫迄之処拜借可仕旨申聞拜借仕候、併御武器迄茂金子引当テニ追々出候御時節、拜借仕候段御不審之段奉忍入候、

端書

御他言御用捨之処奉願候処、蒙御不審候段奉忍入候、不敬幾重ニもお詫奉願候、御尋之廉々等閑之心得は

毛頭無御座候得共、不行届不文之趣奉恐入候、乍然御用捨奉願候、

右猶又御不審之廉々不行届候段奉恐入候、任御疑意乍恐下ケ札之体ニ而別紙を以奉申上候、以上

九月十七日

荒木帯刀

三三 荒木帯刀(玄蕃)隠居・藝居

(天保十二年九月十九日)

荒木帯刀

名代

荒木助左衛門

御自分思召被為在候付、急度被仰付方茂有之候得共、旧家家柄之儀ニ付、格別之以思召不及其沙汰、隠居・蟄居被仰付、せかれ信太郎江当分三拾人扶持被成下、御用番支配并慎被仰付候事

三四 御所替の後、召し抱えの小頭以下残らず御暇

(天保十一年九月二十九日)

兼而一統承知之通、是迄之御減法被仰出、就中当春天

明以来之もの御暇被差出候段、無御余儀事トハ乍申、昼夜御寢食も不被安、格外不便ニ被思召、軽キ身分之者ニ者候得共、既ニ其節御目通被仰付、御懇意も被為在候而、其御深情之分外成儀ハ何連も恐察可罷在、右様之御取斗被遊候^{(世)以下同}而御手を被詰候得共、未タ此分ニ而ハ御立行不被遊、併此上一概之御取斗と不容易、色々卜御心配被遊、彼是御仕法之儀も御手後レニ相成候内、次第ニ御手詰ニ相成、其上積年御借財相嵩候上、銀主共之助力ニ而追々日を送候処、此度御勝手方役人共江御直書を以被仰出候趣、一統承知之通、大坂并自他銀主向江御返銀御断被仰付候付而ハ、猶更之儀、差当り必至と御手詰之場合ニ押移、進退如何共被遊方無之、無御抛今般御所替以後被召抱候小頭以下之ものも当分之處、勤方御用捨御扶持□被成下、為撃半扶持ツ、被成下、且天明以後被召抱候小役人并其以来御取上之小役人共、当分無勤被仰付、右ニ付小役人以下之処格外御人少ニも相成候付、是迄末々之勤所先御格例被相

転、当分之各勤方左之通被仰付候、併格禄役柄之人者

別而之儀、深く氣之毒被思召候得共、無拋儀致恐察、

銘々不肖を忍ひ、御為筋一途ニ存込、何連も打寄御方

立申上候心得ニ而無間欠精勤候様御頼被仰付候、尤惣

出仕其外都而出仕之節詰所之儀ハ是迄之通可被相心得

候、猶非常之節勤方其余委細之儀は御目付へ可被承合

候、

三五 解雇の小頭以下のうち、新抱えとなる家筋

(天保十二年九月二十六日)

小頭以下

末々

今般御減法ニ付、小頭以下小もの人数式百三拾人ニ

被仰付、依之出石御抱家筋之面々御暇被成下、一ヶ

年之任給被成下候事

一 右ニ而ハ小頭以下御軍役を始人数不足ニ付、

一 正徳年中以前御抱家筋之族并上田御抱之家筋、一

且切レ目有之候共、正徳已前之家筋ニ准し、是迄

御雇之面々新抱被仰付候事

一 享保已後御抱家筋之もの、依願是迄御中間相勤候

面々新抱被仰付候事

一 御弓・鉄砲・足軽五組之余、別ニ浮組壱組被相立、

月番江御預り被仰付候事

但、以来代り合之節、右六組外ニ御足軽ニ可召抱人物有

之節、五組人数相□リ居候ハ、浮組入置、五組欠口江

入人可申付事

一 以来御普請奉行支配御足軽御止メニ被仰付、右ニ付

御足軽六組之儀ハ不殘御中間組ニ入置可申事

三六 野田恒太夫投訴吟味手続口書

(天保十二年十月十六日)

野田恒太夫外四人之者共へ昨日評席へ呼出、口書之

趣相違無之哉相尋候処、相違無之段申達候付、印形

為致候由、口書左之通、

手続口書之覚

去子十月十六日夜、追手御門江投訴体之者有之候処、

私仕候哉御尋有之、覺無御座旨申上候得共、段々御吟味詰ニ相成候付、申上候、去年来小頭已下之者とも之内御暇被成下、無勤等被仰付候処、私槍衛門弟中ニも右之者有之、稽古寄合之節も嘆合候儀共承り、氣之毒ニ存、并上御大切と奉存、最初ハ願書之心得ニ而認懸り候処、段々風聞承り候儀など書加へ、文意苦々敷投訴状体ニ相認居候折節、同町岡右衛門罷越候ニ付、常々心易ニ任セ右下書為相見、其後門弟之内小人町勘太夫・田結庄町御足輕弥右衛門せがれ弥藏・私同町此右衛門・運右衛門江ハ稽古寄合之折為相見、投訴ニ仕可然由申合、其後運右衛門宅ニ寄合、私清書仕、御家中様方之内、私存付ヲ以多人數御名当仕、同夜追手御門ニ運右衛門ヲ除外四人のものへ為張付、文意之儀ハ私取認置、為読聞候より何連も同意仕、投訴ニ取計候段ハ私ハ半起り、右御家中様御名当之内及相談候向も有之哉之段、御吟味有之、草川三右衛門様江入御内見以外、何方へも相談仕候向等ハ無之、上御大切とも存取計候

儀ニ候得共、取計方も可有之処、身分柄不似合之段御尋ヲ受、今更一言も申披き無之、存込之儀有之候者可申上筋相立候儀ハ御聞届可有之旨被仰聞候得共、素ハ私身分之儀ニも無之、全く風聞等書認候儀故、中立候儀無之分別、御支配頭様も右同様被仰恐入候得共、同様申上候儀ニ無御座、右体取計候始末、何共奉恐入候、此外右五人のもの共へ、別ニ引合候儀一切無御座候、

丑十月

野田恒太夫[㊦]

去子十月十六日夜、追手御門投訴体之もの有之候処、右ハ野田恒太夫へ掛組、私共并運右衛門仕候段御吟味被仰付、右ハ去秋銘々共無勤御繫扶持為被仰付、当惑仕罷在候内、勘太夫・弥藏・運右衛門・此右衛門ハ恒太夫槍術指南ヲ受候故、度々会合仕候節、常々嘆合候処、其後風と投訴体之書面相認置候由ニ而恒太夫為読聞、右ヲ投訴ニ可仕旨申候ニ付、何方ぞ御役人様方之御門内ニ而も投込候位之手輕き事哉と相心得、師範之

儀ニハ有之、難黙止存し、風と申分ニ随ひ、岡右衛門儀
 ハ其以前恒太夫宅へ罷越候節、右下書為致一覽候ニ付、
 宜敷出来候と存し、是又風と同意ニ及び、其後何れも
 運右衛門宅へ寄合候上、恒太夫自筆ニ而清書相認、上
 書御家中様方多人数之御名前宛等迄同人存候ヲ以相認
 出来之上は、夜追手御門へ張付可申旨申聞ニ付、運右
 衛門・此右衛門・弥藏・勘太夫罷越候得共、右書面之
 廉々私共身分ニ而ハ、別相分之あと退心とも相成り、
 色々心配仕候得共、恒太夫氣質ニ而ハ迎も相止メ不申
 と存し、同人申ニ任セ、右体同意仕取計候始末、并其
 砌御支配頭様ヲ右投訴之儀御尋之上、願筋等有之候儀
 哉と被仰聞候得共、一切覚無之、上願筋等も無之段、
 印書差出候ニ付而ハ、尚又一同申披無御座、奉恐入候、

勘太夫[㊟]

岡右衛門[㊟]

弥藏[㊟]

三七 酒勺内記三百五拾石、仙石内藏介千百石

(天保十二年十月二十六日)

酒勺内記

老年之処、年来格別出精相勤尤之儀被思召、依之今般
 御年寄座上、勤方は迄之通、并先知之通三百五拾石被
 下、此上相厭出精相勤候様、

仙石内藏介

亡父主計再勤之節被仰出置候趣有之ニ付、先知之通可
 被下処、主計在勤中之義^(儀)ニ付思召も被為在候付、今般
 知行千百石被成下、此文武共厚く相心懸ケ勤向諸事
 見習、追々格別精勤いたし候様、

三八 出石入封後抱えの侍、無勤郷方住居

(天保十二年十一月五日)

一殿様御上段江御着座、御用番披露左之通

御意有之、筆頭ヲ御請申達候上、御用番御取合仕

何連茂年来出精致し屢々手薄く扶助申付、別而艱

難相勤尤之儀、満足ニ存ル、減方未相立、無愧今般乍氣之毒新家之者共無勤申付、古参之面々江茂預り米并勤方繰下ケ申付ル、委細者年寄共々申談ル、

一 殿様御入被遊候上、御年寄共御上段下正面ニ居直り左之通御用番申渡

唯今御直ニ被仰出候通、一統年来出精相勤、追々御充行等減少被仰付、難渋之中、取統致精勤尤之儀、御満足被思召候、兼而御承知之通、是迄色々御趣法立被転候得共、此分ニ而ハ御取統難被遊、一統も追々困窮難立行、御公務迎も無覚束次第、日夜御心痛嘆ケ敷被思召候、依之無御余儀御所替後被召抱被召出候面々、今般無勤被仰付、席是迄之通、乍少分御扶米被成下、一統ヘ江も御充行之内御預り米并御借受米被仰付、御取立之御侍分其以下勤方繰下被仰付候、委細ハ御書付を以被仰出候、承知被致マセ、

一 左之通御書付三通、筆頭々江相渡候様御目付江申談相渡、

一 統年来出精相勤、近来分而御充行等減少被仰付、格別難渋之中、取統致精勤尤之儀、御満足被思召候、然ル処、承知之通先般御減知被蒙仰候已来、御手元ハ勿論御家中御充行其外諸向格外御減少被仰付、御居間向其外御建物迄追々御取払、是迄精々御趣法被転候得共、何分御変事後御半高ニハ乍申、御所務ニ至候而ハ漸三步一程之御残知ニも相成候事故、如何様致し候而も差当り御公務さへ無覚束、一統も追々難渋差詰、飢渴を凌候計之次第、唯々日々ニ上下及衰頹候段、日夜御心痛嘆敷事ニ被思召候得共、無御余儀御所替後被召抱被召出候新参之面々、今般無勤被仰付、席是迄之通、少分之御扶持米被成下、郷方住居被仰付、乍少分家作料被成下、且古参之面々江も御充行之内御預り并御借受被仰付、当時御取立之御侍分御小姓組以下

小役人勤被仰付、小頭以下は御取立之小役人以下
小頭以下勤被仰付候、尤此度新家之面々無勤被仰
付候付而者、諸向御人少之儀、此上猶更一同一和

致精勤、常々格別遂節儉、文武之道疎ニ不相成様相
心懸、仮令難渋之中たりとも、何等御公務之節は
勿論御差支無之様相勤候儀、専ら此度之御趣意ニ
候条、此所厚相心得候様、肝要之事ニ被思召候事

十一月

古参之面々江

右知行・無足・大扶持・小切米共都而三割方御預被
遊、并御所替後世代之内右三割引之余分ニ減祿致し
候儀有之面々ハ、余分之所是又当分御借受、此度其
減祿高被成下候事

一 知行之輩御所替後世代之内無足ニ相成、又ハ從來無
足ニ而当时知行ニ相成候面々ハ、無足高を知行ニ御
直被成下、尤都而減高ニ而五拾石之高ニ不相詰面々
ニハ、格別之以思召五拾石高被成下、無足之面々も

右趣ニ准し、減高七石式人扶持高ニ不相詰面々ハ七
石式人扶持高被成下、小切米同断五石式人扶持高被
成下候事

一 此度御役高減少被仰付、尤来三月迄ハ是迄之通、四
月は左之通被成下候事

三百石

御年寄

貳百五拾石

御中老

御番頭

(中略)

一新家之面々、此度無勤被仰付候処、御人少ニ相成候
儀ニ付、御都合ニ寄諸向勤方線下ケ被仰付候儀も可
有之候間、兼而其心得可罷在候事

一 追々御充行減少被仰付候付而者、為取統、無勤郷方
住居致し度向も有之候ハ、新家之通御扶持米并家
作料共可被成下候間、勝手ニ相願可申事

十一月

一 新家之面々

今日被仰出之趣ニ付、中絶書之表を以、從今日直ニ

無勤被仰付候、尤委細者御目付ヲ可申談事

一 以来格式ニ不拘御侍并小役人とも一同御用人支配被仰付候事

一 以来年頭・御帰城・御発駕之節計リ罷出可申、尤其節他參罷在候ハ、御用捨ニ付、其段御用人・御目付江可申達事

但、右出仕之節并平日御用向有之、御対面所江罷出候節は、御内支關ヲ御鞍之間江罷出可申事

一 無勤中御扶持米左之通

米五石ツ、御侍分

御取立之

御侍分

同三石五斗ツ、

小役人詰番迄

右之通被成下、尤當時被下置候御充行之儀ハ来寅ノ

三月迄、是迄之通被成下、三月ノ前条之通御扶持米

被成下候事

一 郷方住居被仰付候付、家作料左之通被成下、

銀拾枚 御侍分

同七枚 御侍分

一 為取統他所江引越申度、又ハ御領分致住居候とも勝

手ニも相成、御手当金頂戴致し度面々ハ

金拾五兩 御侍分

家族老人ニ付同壹兩ツ、

御取立之

銀拾五枚

家族老人ニ付銀壹枚ツ、

御侍分并 小役人詰番迄

右之通可被成下候、尤右之面々江御扶持米不被成

下候事

但、他所住居之内ハ御手離ニ可被仰付候、先方無故障追而致帰住候ハ、其段御用人・御目付江可申達候、其節外並之通相心得可申候、且御手当金致頂戴候儀ニ付、御扶持米ハ不被成下候、

一 右御手離中たりとも、御目見等之節は依願外並之通

被仰付候、

1 減知後の藩体制立て直し

一 郷方住民之儀、自分致相對引越度村方有之候ハ、

其段御用人迄可申達、若し自分相對出来兼候ハ、

是又可申達候、村方御割付可被仰付候、尤来三月迄

引越可申事

一 是迄自分宅之面々ハ其儘罷在候とも、又ハ郷方江引

越、致住居候とも可任勝手事

但、自分宅之面々江ハ家作料不被成下候事

一 郷宅江引越致住居候とも、又ハ御手当金頂戴致候と

も、兩様□所取極、当年中(一、二)否御用人江可申達候事

一 郷方住居之面々宗門改之儀者、宗門奉行ハ無勤一同

別帳を以可申談候間、年々三月初旬迄ニ此表江罷出

印形可致候事

但、他參罷在候ハ、親類ニ而代判可致事

一 郷方住居之面々御触事等は御郡奉行ハ為知可申候間

右ニ而承知可致事

但、引越候迄ハ是迄之通

一 以来諸願并御目付江断等、都而不及其儀、尤当人死

失并縁談・出生之儀ハ御用人御目付江可申達事

一 屋敷持御長屋拝借之面々、其心得も可有之候得とも

不持荒候様致し、追而郷方引越之節御普請奉行江引

渡可申事

十一月

一 今般無勤被仰付候面々左之通

卷

長谷川矢柄

伊東源右衛門

竹村庸藏

杉立章庵

田中伊兵衛

岩直紀

増田貫次

樺本豊次郎

多田助之允

太田多仲

杉本舍

長谷川究内

小山徳甫

堀新之丞

嶋村与兵衛

永井琢藏

鳥居梢

平林次郎

工藤熊次

中山泉庵

井上涼介

曲淵作右衛門

鳥居勘助

広瀬重洌

井上謙藏

梶田蟬助

岡本甚左衛門

百瀬良岱

小林六郎兵衛

白井源左衛門

内藤東太郎

萩鴻之助

井上藤兵衛

谷野男也

堤新平

惣三拾五人

一 小役人右同断

依藤庄三郎

御手離 中嶋儀兵衛

黒川門兵衛

依田隆湖

国友彈九郎 田中仁右衛門 (御侍分)
 林 定兵衛 橋本卜齋 (小役人)
 白杉葆助 中村如筑 窓ノ五拾人
 土野卯之助 福島久右衛門
 依田良藏 中村与右衛門
 ノ七人 守本小一兵衛
 ノ八人

三六 他領札通用禁止通達
 (天保十二年十一月二十四日)
 町在へ

銀札遣之儀、前々々札遣ひ致し來候場所并享保十五年以後新規ニ相願候分ハ格別、右之外向後新規之場所札遣ひ之例有之候共、中絶之分ハ札遣難成旨從公儀被仰出も有之候処、他向ニ而米切手又ハ錢札杯と号し差出候切手等、御領分ニ而取交致通用間敷旨申触置候儀、如何敷事ニ候、以後心得違他所札取扱候もの於有之ハ、小役之もの遂吟味、所持之銀札取上候上、急度答可申付候事

十一月二十四日

2 再び幕府の鉄槌

三〇 阿部・中川両侯、関口齡助強制召し捕りを通告
 (天保十四年七月十一日)

一 江戸表当月二日夕出立之御手飛脚御足輕^{万藏}辰平^{今夕七}ツ時前到着之處、殿様・御奥様益御機嫌能被成御座、都而御別条無之旨、然ル処、当月二日朝五時ノ阿部能登守様・中川修理大夫様当方御屋敷江御出被成、殿様江御逢被成、御家來関口齡^{助以下同}介儀身分不都束之儀有之付、御召捕御吟味可有之処、左候時ハ御家御大事ニ茂及候儀ニ付、御親類様ニ而御召捕御吟味相成候様、真田信濃守様江阿部様・中川様被為召、御内意被為在候付、右御両家様ノ先月廿四日齡介為御召捕御人数此表江差向候由之處、殿様此間中川様江御出被遊、段々深く御心痛被遊候趣被仰上候付、中川様ノ真田様江御内慮御伺被成候処、左候得ハ一向此

方様ニ而御召捕被成、御両家様ニ御差出ニ相成候ハ、猶更御家ニ御為茂宜趣、真田様々段々御内慮被為在候付、右齡介儀早々御召捕、御両家様江御差出相成候様、尤急度御召捕御差出被成候旨御請書茂御差出置被成候様ニと、殿様江御直ニ被仰述、猶又御側近く相勤候而御隔意不被為在者御召被成候趣ニ付、(原本)則極人罷出候処、右御同様之御意有之、(長岡右中)右仲茂被為召前条之趣厚き御意有之、万一表立御吟味等ニ相成候而は御家甚以御大切之儀、真田様格別之思召を以御内意被成下候趣、(くま)得斗相心得、齡介儀召捕御差出ニ相成候様、無手拔取斗(前)可申旨、且此表ニ而召捕候ハ、右為注進、即刻急飛脚を以江戸表江申遣候様被仰出候由、前条之趣此表と厚相心得、無手拔取斗、齡介儀万一及異儀候儀有之候共、万端御嚴重ニ御取斗御召捕、成丈ヶ道中茂差急キ差出候様、分而從殿様被仰付候趣申來、其外御用向左之通

此節甚以御家御大切之儀、万々一表立御吟味等ニ相成候

而ハ、先年之御一件ハ御重く可相成哉之由ニ而、真田様厚キ思召を以御両家様江御内意被為在候趣、呉々御大切之御儀、齡介及異儀候取斗有之とも其段厚く御心得、御嚴重ニ無手拔御召捕早々御差出相成候様御取斗可被成、且召捕候ハ、即刻御手飛脚を以御注進被仰越候様、別書ニ申遣候通注進廿五日限りニ而御召捕之御届茂可被差出、御請書茂今日殿様ハ御直御差上被遊候儀ニ付、此御手飛脚此表江相違候ハ、早々御取斗御召捕之注進廿五日ハ早々ニ江戸表江致着候様、尤齡介召捕之上ハ道中嚴重ニ取斗、不取逃様網乗物、又は銃前付駕ニ而御差出被成、御家格も可有之候得共、道中警固随分嚴重之方可然候、中川様御沙汰有之由、依之御先格ハ御人数ハ相増、御目付以上之処ニ而人物御撰之上、兩人附添可然哉、且其以下迎も随分御手薄無之様、以下たり共、人物御撰之上夫々御附添可被成候、且前条真田様江之御請書左之通此度家米関口齡介召捕差出候様、能登守・修理大夫を以御内慮被成下、重々恐入奉畏候、往返日数廿四・五日之内ニ而召捕可申、召捕候上は早々在所差上、道中十五・六日之内当地江着仕候得共、早速両家江遣、右兩家之内ハ奉申上候含ニ御座候、先は御請迄如斯御座